

三 マルクス研究

(續經濟學研究 第一篇)

一 マルクスの社會主義論

二 マルクスの經濟學論

三 マルクスの政治學論

四 マルクスの社會學論

五 マルクスの哲學論

六 マルクスの文學論

- 一 マルクス『資本論』第三卷研究の一節
- 二 不變の資本・可變の資本
- 三 地代は餘剰なりや
- 四 マーシャルの利潤論とマルクスの平均利潤率論
- 五 マルクスの不變・可變資本とアダム・スミスの固定・流通資本との關係
- 六 企業倫理論
- 七 ジム・バルトよりマルクスへ
- 八 難解なるカール・マルクス

一 マルクス『資本論』第三卷研究の一節

(餘剰價值率・利潤率・平均利潤率論)

一 小 引

『資本論』第三卷 (千八百九十四年出版) は二冊より成り、篇を分つこと七左の如し。

第一冊

- 第一篇 餘剰價值の利潤となり、餘剰價值率の利潤率となるの理
- 第二篇 利潤の平均利潤となるの理
- 第三篇 利潤率の傾向的遞落の法則
- 第四篇 商品資本・貨幣資本の商品營業資本・貨幣營業資本となるの理
- 第五篇 利潤分れて利子と企業利潤となるの理

第二冊

- 第五篇 同上續論

第六篇 餘剩利潤地代となるの理

第七篇 收入論

資本論第一卷は『資本生産經過論』第二卷は『資本流通經過論』を試みたる後、第三卷は『資本的生産の全經過』を論ず。即ち資本を中心とする現時の經濟生活の實際上の構造を叙述するを主眼とするもの也。マルクス自ら其結構を説いて云ふ。

In ihre wirklichen Bewegung treten sich die Kapitale in solchen konkreten Formen gegenüber, für die die Gestalt des Kapitals im unmittelbaren Produktionsprocess, wie seine Gestalt im Cirkulationsprocess, nur als besondere Momente erscheinen. Die Gestaltungen des Kapitals, wie wir sie in diesem Buch entwickeln, nähern sich also schrittweise der Form, worin sie auf der Oberfläche der Gesellschaft, in der Aktion der verschiedenen Kapitale auf einander, der Konkurrenz und im gewöhnlichen Bewusstsein der Produktionsagenten selbst auftreten. 3. Bd. I. Theil. S. 1-2.

現實社會の運動に於ては、資本は皆此種の具象的形態に於て相對立するものにして之に對しては、直接生産行程に於ける資本の形態も、將た亦流通行程に於ける其の形態も特殊の要因としてのみ現はるゝに過ぎざるものなり。従て本卷に於て論ずる資本の各種

形態は、漸次に社會の表面に於て、各種資本相互間の動作及び競争に於て、并に生産關與者の普通意識に於て、現はるゝ所の其の形態に歩一歩接近し來るものと知る可し

今其意を言換ゆれば、資本論第一卷は單純に直接生産行程としての資本生産の法則を考究し、第二卷に至りては一轉して、流通生活に於ける其作用を説きたれば、今此第三卷に於ては、此兩個の方面を綜合して、資本運動の全經過其のものに就て實際生活に現はるゝ具象的形態を究めんとするものなり。然れどもマルクスは果して始めより斯く秩序的に構案せるものなりや、或は強て順序あるものゝ如く装ふものにあらずや。是れ第三卷研究の最終の問題たるなり。請ふ以下項を分つて彼の説く所を仔細に點檢せしめよ。

二 餘剩價值變じて利潤となるの理

第一篇は先づ如何にして餘剩價值が利潤に變じ、餘剩價值率が利潤率に變ずるかの理を論ず。其論第三卷第一冊第一頁より第百十九頁までに載せたり。

價值と餘剩價值とが實際の形態に於て、生産費と利潤とになるは如何なる經過を経る

や、是れマルクス第一の論點なり。曰く資本の立場より見れば、商品の價は勞働にあらずして資本なり。資本家が一定の商品の生産を爲すに方り支出する費用は資本の支出に外ならず。即ち費用は資本の費用のみ。而して費用の多少を名けて、マルクスは費用價格 *Kostpreis* と云ふ。然るに生産の結果資本家の收得する餘剩價值は、之を名けて利潤と云ふ。蓋し利潤は投下資本の成果のみに限らず、又元より可變資本分のみに限らず、故に利潤は費用價格と同一物にあらず、獨立なる經濟上の一項目にして、専ら資本家に屬する現象なり。即ち

$W = c + v + m$ 商品 = 不變資本 + 可變資本 + 餘剩 なる公式は變じて $K + m$ 費用 + 餘剩 となり、又た $K + p$ 費用 + 利潤 となる。換言すれば、商品の價值は費用價格と利潤との合計より成るなり。マルクス故に曰く、

Der Profit, wie wir ihn hier zunächst vor uns haben, ist also dasselbe was der Mehrwert ist, nur in einer mystificirten Form, die jedoch mit Nothwendigkeit aus der kapitalistischen Produktionsweise herauswächst. Weil in der scheinbaren Bildung des Kostpreises kein Unterschied

zwischen konstantem und variablem Kapital zu erkennen ist, muss der Ursprung der Wertheveränderung, die während des Produktionsprocesses sich ereignet, von dem variablen Kapitaltheil in das Gesamtkapital verlegt werden. Weil auf dem einen Pol der Preis der Arbeitskraft in der verwandelten Form von Arbeitslohn, erscheint auf dem Gegenpol der Mehrwerth in der verwandelten Form von Profit. (III. I. S. II.)

吾人が今茲に見る利潤なるものは、餘剩價值と同一物なり。唯其形態の神祕なるが故に之を看破し得易からずと雖も、其は資本的生産方法の本質上已むを得ざる所なり。費用價格の表面的形成に於ては、不變資本と可變資本との間に何等の區別を認むること能はざるが故に、生産行程の間に起る價值變化の淵源は、單に可變資本のみに繋るにあらず、全資本に繋るものなり。又一方に於て勞働力の價格が勞銀てふ形態に變する如く、他方に於ては、餘剩價值は利潤てふ形態に變じて現はるゝものなり。

と。而して斯く利潤なる態を取りて顯はるゝ餘剩價值は、可變資本にのみ關連せず、全資本に關連すと認めらるゝが故に、餘剩價值率 $\frac{m}{W}$ (の W は可變資本 m は餘剩價值) は變じて 利潤率 $\frac{m}{C}$ (C は全資本) となるなり。

即ちマルクスの言を以つて云へば、『餘剩價值に現はるゝものは資本と勞働との關係之なり。資本と利潤即ち資本と餘剩（一方に於て流通經過の間に實現せらるゝ商品の費用價格控除殘額たり他方に於ては資本對餘剩の關係によりて全資本に對する割合を以て言表はさるゝ殘額たるもの）との關係に於ては資本は其自らに對する比例として顯はる』

今諒解し易からしめんが爲め右の理法を項に分つて示せば左の如し。

- 一 全資本 (C) は不變資本 (c) と可變資本 (v) とより成る。二 可變資本は餘剩價值 (m) を生ず。三 餘剩價值の可變資本に對する比例 $(\frac{m}{v})$ を餘剩價值率と云ふ。之を m' にて言表はす。四 依て次の公式を得 $\frac{e}{m} = \frac{m}{m'}$ 五 從て又次の公式生ず $m = m'v$ 六 今餘剩價值を可變資本のみに關連せしめず、全資本に關連せしむる時、之を利潤 (p) と云ふ。七 仍て餘剩價值の全資本 (C) に對する關係 $(\frac{m}{C})$ は利潤率なり。之れを p' を以て言表はす。八 從つて次の公式を得 $p = \frac{m}{C} = \frac{m'}{c+v}$ 九 然るに m に換ふるに、前に得たる其價 m' を以てするときは、 $p = m'v : C = m' : \frac{C}{v}$ なる新公式を得。十 今之を比例式に言改むるときは、 $p : m' = v : C$ と成る可し。

茲に於てか利潤率の餘剩價值率に於ける關係は、可變資本の全資本に於ける關係に均しきを知る可し。

此比例より生ずる當然の結論は、 p は常に m' より小なりと云ふと是なり。何となれば v は常に C より小なればなり (C は v と c との合計なり)。但し可變資本のみにて、不變資本全く存せざる場合は勿論問題外なり。而して斯くの如き場合は事實上考へ得可からず。是によりて知る利潤率は多數の可變要件の作用に依ることを。而して其主なる働因は二つあり、

一 餘剩價值率

二 資本の結合割合 可變不變兩資本の比例關係を云ふ

是れなり。此れ餘剩價值の利潤となり、餘剩價值率の利潤率と成る經過の一斑なり。

以下マルクスは 一 可變要件の變動に基く利潤率の高低を第三章に於て論じ、二 資本回轉度數の利潤率に及ぼす影響を第四章に論じて後、第五章に入りて『不變資本の經濟』を説く。彼は不變資本率の『大さ』の利潤率に於る作用を名けて、不變資本の經

済と云ふなり。蓋しマルクスの定理に於ては、不變資本の割合少き程利潤率は高まるものなり。即ち左表の如し。

C	c	v	m'	m	m'
(全資本)	(不變)	(可變)	(餘剰價值率)	(餘剰價值)	(利潤率)
100	80	+ 20	100%	20	20%
100	70	+ 30	100%	30	30%
100	60	+ 40	100%	40	40%
100	55	+ 45	100%	45	45%
100	95	+ 5	100%	5	5%

故にマルクスは不變資本を用ゆるに
方り、餘剰價值の減少に抵抗し得可き方
法を論ずるの要あり。是れ『不變資本
經濟論』の起る所以なり。第六章は市
價變動の利潤率に及ぼす作用を説き、第
七章には補論を試みて第一篇を結ぶ。

此等諸論マルクス學說の大體に於て増減する所なし、第一第二兩章を以て第一篇の要旨
盡く。故に茲に絮説せず。

三 平均利潤率の難關

斯く生じたる利潤は如何にして『平均利潤』となるや。是れ第二篇の問題なり。第

三卷一冊二十頁より百九十頁までに論ずる所是れなり。

此問題は『平均利潤率の謎』“Rätsel der Durchschnittsprofitrate”としてマルクスの學說
中最も著名なるものに屬せり。資本論第一卷に於ては、マルクスは此謎を問題として残
せるのみにて、此に解答を與へず。エンゲルスは資本論第二卷の序文中、第二十

Thatsächlich produciren gleiche Kapitale, einerlei wie viel oder wie wenig lebendige Arbeit
sie anwenden, in gleichen Zeiten durchschnittlich gleiche Profite. Hier liegt also ein Widerspruch
gegen das Werthgesetz vor, den schon Ricardo fand und den seine Schule ebenfalls zu lösen
unfähig war. Auch Rodbertus konnte nicht umhin diesen Widerspruch zu sehen, statt ihn zu lösen,
macht er ihn zu einem der Ausgangspunkte seiner Utopie. Diesen Widerspruch hatte Marx bereits
im Manuscript „Zur Kritik“ gelöst; die Lösung erfolgt nach dem Plan des „Kapital“ in Buch.

III.

實際に於ては同一額の資本は勞働を使役する多少に拘らず同一時間内には平均上同
一の利潤を生ず。是れ價值の原則と納鑿相容れざる反對の事實なり。リカルドは既
に此を看破したれども彼も其祖述者も此矛盾を解釋する能はざりき。ロドベルトスも

亦此矛盾あるに心付きたれども、之を解決せず單に之を以て其理想の出立點と爲せるのみ。然るにマルクスは既に「經濟學の批評」の草稿中に此問題を解決せり。資本論に於ては第三卷に至りて始めて此矛盾に對すマルクスの解決與へらる可きなり

と公言したれば、人皆首を伸べて第三卷の此點に關する所論を聞かんと待てり。而して此間マルクス説を揣摩して、此謎の解決を先づ試みたる學者多し。其重なる者左の如し。
 Lexis in Conrad's Jahrbücher XI, 5. 1883. SS. 452-65.—Conrad Schmidt, 1. Die Durchschnittspoftrate auf Grundlage des Marx'schen Wertgesetzes. Stuttgart. 1889. 2. in "Neue Zeit" 1892/93. No. 4. 5.—Fireman in Conrad's Jahrbücher. III, 4. S. 793.—Wolf in Conrad's Jahrbücher. N. F. II. S. 353.—Achille Loria in Nuova antologia. April 1883.—Stiebeling, Das Wertgesetz und die Profitrate. New York.
 而してエンゲルスは第三卷の序文中に此等學者の所論を詳評し、一も嘗てマルクスの解答に的中するものなきを明かにせり。然りマルクスの解釋法は全く人の意想外に出でたり。學者が茲に想到するを得ざりしは當然なり。
 平均利潤率の謎とは左の如し。

- 一 餘剰價值は可變資本の多少に準ず。可變資本多ければ餘剰多く、少なければ餘剰少し。
- 二 利潤率は餘剰價值を全資本（不變可變の合計）に對する比例を以て言表はしたるものなり。故に可變資本多きときは利潤率高く、少きときは利潤率低し。
- 三 然るに實際に於ては可變資本分の多少に拘らず同一の全資本額は同一の平均利潤率を有す。是れ矛盾なり。

即ち前段掲げたる表に於て

	可變資本	利潤率
一	20	20%
二	30	30%
三	40	40%
四	15	15%
五	5	5%

となる可き筈なるに實際に於ては 一 二 三 四 五 何れの場合に於ても利潤率は同一なり（マルクスの例にては20%なり）。是れ明かに矛盾なり。何れが正くして何れが誤なりや、兩者共に正しきや。兩者正しとすれば、此矛盾は之を如何に釋く可きや。之を平均利潤率の謎と云ふなり。

マルクスの此謎を釋くの道極めて平易簡單、殆んど人をして啞然

たらしむ。曰く

一 商品が其價值に於て賣買せらるゝものなれば（マルクス第一卷の所論は斯く前提したるなり）利潤率は必ず區々ならざる可からず。

二 然るに實際に於ては、商品は其價值に於て賣買せられず。

三 即ち實際に於ては、平均結合比例（不變可變兩資本の）以上の比例にて結合せられたる資本を以て生産せられたる商品は其價值以上に賣買せられ平均以下の比例の資本を以て生産せられたる商品は其價值以下に賣買せらるゝなり。

マルクスは此理を説くに左の一表を以てす。

	本 結 合 比 例	餘 價 値	消費したる 可變資本	商 品 の 價 値	費用價格	商 賣 品 價	利 潤 率	價 値 と 賣 差
I	80c+20v	20	50	90	70	92	22%	+8
II	70c+30v	30	51	111	81	103	22%	-8
III	60c+40v	40	51	131	91	113	22%	-18
IV	85c+15v	15	40	70	55	77	22%	+7
V	95c+5v	5	10	20	15	37	22%	+17

右説明

一	一の場合是不變資本	80	可變資本	20	合計	100
二	二の場合是不變資本	70	可變資本	30	合計	100
三	三の場合是不變資本	60	可變資本	40	合計	100
四	四の場合是不變資本	85	可變資本	15	合計	100
五	五の場合是不變資本	95	可變資本	5	合計	100

の割合に結合したる資本を以て生産に従事するものとす。

二 而して餘剩價值率（ $m-v$ 即ち m' ）は皆同一なりと云ふがマルクスの定論なり。
今其率を 100% と假定す。

三 然るときは

一の場合	可變資本	20 に對し	其 100% の餘剩價值は 20
二の場合	可變資本	30 に對し	其 100% の餘剩價值は 30
三の場合	可變資本	40 に對し	其 100% の餘剩價值は 40

四の場合 可變資本 15に對し 其 100%の餘剩價值は15
五の場合 可變資本 5に對し 其 100%の餘剩價值は5
となる可し。

四 費用價格即ち生産費は (1)可變資本の全部 (2)不變資本中消費せられたる部分の二を回收するに足るだけの額に相當す可き筈なり。(2)の割合を左の如く假定す。

一の場合 50 二の場合 51 三の場合 51 四の場合 51
五の場合 10

五 仍て費用價格の額は左の如くなる

	可變資本	消費資本額	費用價格
I	26	+	50 = 76
II	30	+	51 = 81
III	40	+	51 = 91
IV	15	+	40 = 55

V 5 + 10 = 15

六 商品の價值は右の費用價格に餘剩價值を合算したるものに相當す。仍て、

I. $76+20=96$ II. $81+30=111$ III. $91+40=131$ IV. $55+15=70$ V. $15+5=20$ なり。

七 今商品が其價值に於て賣買せらるゝものなれば其賣價は左表の如くなる可きなり。然るに實際は之に異なる。

一の場合	90
二の場合	111
三の場合	131
四の場合	70
五の場合	20

八 何となれば、實際に於ては 一 平均結合比例に對し生ずる餘剩價值と 二 費用價格との合計が賣價となるものにして平均結合比例以上に不變資本を用ゆるときは其賣價は右の價值以上に立ち其以下に不變資本を用ゆるときは其賣價は右の價值以下に立つものなればなり。

九 今此の平均結合比例を見出すには 一 より 五 までを一括の資本と看做し、不變可變兩資本の百分比例を算出す可し。即ち

資本總額 $100+100+100+100+100=500$ 不變資本總額 $80+70+60+85+95=390$
 可變資本總額 $20+30+40+15+5=110$

之を百分比例に引直せば左の如し

$$\frac{390}{500} = 78\% \quad \frac{110}{500} = 22\%$$

而して 餘剰價值總額 $20+30+40+15+5=110 \div 500 = 22\%$ なる。

十 仍て平均結合比例 $78 \div 22 = 100$ に對して生ずる餘剰價值は22%なるを知る。

是れ即ち全資本總額に對する平均利潤率なり。

十一 從て實際の賣價は左の如くなるを知る。

$$I \quad 70+22=92 \quad II \quad 81+22=103 \quad III \quad 91+22=113 \quad IV \quad 55+22=77 \quad V \quad 15+22=37$$

十二 即ち資本結合の割合異なるに従ひ或場合は其價值以上の賣價を有し或場合は以下の賣價を有するを知る。今之を右五の場合に就て算出するときは

一の場合 賣價は價值より多きこと 二

二の場合 賣價は價值より少きこと 八

三の場合 賣價は價值より少きこと 一八

四の場合 賣價は價值より多きこと 七

五の場合 賣價は價值より多きこと 一七

なり。

十三 然るに再び五の場合を合算するときは $22+8+18+7+17=64$ となり、箇々の場合の差異は茲に消滅して全體の上に於て賣價と價值とは同一なるを見出すなり。

斯く得たる實際賣價をマルクスは『生産價格』と名く。曰く、

Die Preise, die dadurch entstehen, dass der Durchschnitt der verschiedenen Profitraten der verschiedenen Produktionsphären gezogen und dieser Durchschnitt den Kostpreisen der verschiedenen Produktionsphären zugesetzt wird, sind die Produktionspreise. J. Bd. I. S. 135.

各種異なる生産業の異なる利潤率より得たる平均率と各種異なる生産業の費用價格と合算するにより得る價格は之を名けて生産價格と云ふ

と。マルクスは之を以てアダム・スミスの所謂『自然價格』 Natural price リカルドの所

謂「生産價格」 price of production フキジオクラットの所謂「必然價格」 prix necessaire と同一物なりと主張す。

* * * * *

以上平均利潤率發生の理を明かにしたり。然れども此は問題の提示のみ、解答は未だし。如何にして此生産價格が現實せらるゝや、何故に資本結合平均率を推定するや、平均利潤率への均等傾向を支配するものは何なりや。既に價值を離れて此比例、此率の左右せらるゝと云ふ以上、其定理とする商品は其價值に於て賣らるゝとの原則は破られ延ては、社會的に必要なる労働時間が商品の賣價を支配せざるを許容するを要するに至る。是れマルクスの労働價值學說を根柢より覆すものにして、彼が實際社會に就て論ずるに至り、第一卷に於ける獨得の主張を全然一擲し經濟學の通説に於けると殆んど何等選ぶ所なき競争價格論に跡戻したるを示すものにあらずや。換言すれば、第三卷は第一卷を順序的に布演したるものにあらずして、全然別個の見解を述ぶるものなり。ゾムバルトは此矛盾を救済せんことを勉めたけれども終に成功せず、後に至り自ら其説を捨てたり。茲

に於て起る問題は、マルクス第一卷の説正しきか第三卷の説正しきかはにして、吾人は兩者を合はせて其間に折衷を試むるの餘地なきを見るなり。此問題に對する予が管見は他日機を得て之を公けにせんとす。

右一篇は明治四十二年七月發行「三田學會雜誌」第二卷第一號に掲載したるものにして、譯文の箇所其他若干修正を加へたり。末句に約したる解答は其大要載せて近刊「經濟學講義」(本全集第一集收録)第一編中に在り、就て参照を乞ふ。

二 不變の資本・可變の資本

資本の用二あり、一は自存にして他は增收なり。資本は生産に用ゐて消失するものにあらず、生産物中に再生産せられて必ず其當初の價值を維持するものなり、之れを資本の自存と云ふ。然れども資本は自存を以て止るものにあらず、生産の結果は、其以上に新な

る價值を生ず、之れを資本の増收と云ふ。マルクスは自存の資本を名づけて不變の資本 (Konstantes Kapital) と云ひ、増收の資本を名づけて可變の資本 (Variables Kapital) と云ふ。而して増收を生ずるものは勞働のみ、故に勞銀に充當せらるゝ資本のみ可變の資本にして、他の生産要具は皆不變の資本なりと主張す。餘剩價值論即ち茲に基く。

マルクスが不變の資本と云ふは形態の不變を云ふにあらず、價值の不變を云ふのみ。一生産經過中に其形態を變ずるものは流通資本にして、一生産經過中に其形態を變ぜざるものは固定資本なり。然れども幾生産經過を重ねる時は固定資本も亦其形態を變ず、永久に其形態を變ぜざる資本なるものあることなし、其變ぜざるものは價值なり。一萬圓の資本は百年の前も一萬圓なりき、百年の後も亦た一萬圓なる可し、唯其一萬圓を具體する形態は今日は商品なるも明日は現金なる可く、明後日は手形なる可きなり。ヒルデブランド故に曰く、資本は形態より云へば常に變化し、大さより云へば變動することなしと。

近來米國にクラーク教授あり主張して曰く、資本は永久に不變なり、變ずるものは資本

にあらず、資本の發現態なる資本財なりと。セリグマン、ホブソン、フエッター、カーヴアール、シーガー、フックス等唱和するもの甚だ多く、流行の新説なり。其不變なりと云ふ亦た固より形態を云ふにあらず、價值を云ふのみ。然るにボエムバヴェルク教授は資本と資本財との區別を否定し、目下明治四十年クラークと論戰酣なり。

何故にマルクスは不變の資本と可變の資本とを區別し、何故にクラークは不變の資本のみを以て資本とするや。答て曰く、他なし、利子の普遍率を前提するが故なり。

利子の普遍率説は經濟學傳來の通説なり。曰く、資本は自存す、自存せざるものは資本にあらず、消費財のみ、此自存は事業の性質使用者の能力によりて異なることなく、全く人格を離れ包圍を超越して行はる、是れ利子に普遍率ある所以なり。一萬圓の資本は之を農業に用ゐるも工業に用ゐるも均しく一萬圓なり。此一萬圓は之れを生産に充用するによりて利子を生ず、此利子は資本自存の價にして、隨所隨時に一定普遍の率を有す。Aの一萬圓は一割の利子を生じ、Bの一萬圓は二割の利子を生ずと云ふことなし。若し之れあらば、其は利子の名の下に他の種類の所得の混合せるものゝみと。

然るに實際に於ては同じく一萬圓の價を有する資本も其生産効程は決して同一なるものにあらず。同じく一萬圓の價を有するも家屋と機械とは生産効程異り、同じく一萬圓を投じて購ひたる機械にても、甲の機械と乙の機械とは生産効程均しからず。然れども生産の分配分たる利子は普遍均一なり。茲に於て此差異を説明するに何等かの工夫を試みざる可からず。其中最も汎く行はるゝは、此等一切の差額を舉げて企業の利潤に繰入るゝ學説是れなり、曰く同じく一萬圓の資本を用ゐて其生産効程に異同あるは資本の作用にあらず、企業能力に差異あるが爲めなり。能力に富み Konjunktur を克く利用するものは、故に Konjunktur 多くの生産効果を挙げ、然らざるものは之れに反すと。 故に Konjunktur 多くの生産効果を挙げ、然らざるものは之れに反すと。

マルクスは此弱點を看過するものにあらず、直ちに敵の刃を取て敵に擬して曰く、然らず、此差額あるは自存の資本以外増收の資本あるが爲めなり。自存の資本は固より一定普通の利率を受く、其以上の餘剰は増收の資本の生ずる所なり、増收の資本とは資本の中此餘剰を生ずる力あるものを云ふ。其力あるものは獨り労働者生活維持の料に充當せらるゝ資本のみ。資本の所有者は自存を以て足る、即ち不變資本の所得として利子を受く可し。可變資本の所得たる増收は之を生じたる労働者の受く可きは當然なり。之れを不變資本の所有者たる資本家並に企業家が收得するは労働者正當の所得を掠奪するものなり。企業の利潤と云ふものは即ち贓物の謂にあらずやと。

クラークは即ち此缺點を補はんと欲す。説て曰く、利子を定むる原則は地代を定むる原則と異ることなく、均しく最終生産力によりて支配せらる。Aの一萬圓は二割の收益を生じ、Bの一萬圓は一割の收益を生ずるは、Aの一反歩の田が米二石を産し、Bの一反歩の田が米一石を産すると其理異なることなしと。是れによりてマルクスの掠奪説に對抗するを得可し。然れども最終生産力によりて支配せられんには、收穫遞減の法則の行はるゝことを立證せざる可からず。常に形態を變ずる資本は不變不易の土地と同一視するを得ず。リカルドの所謂土地の『固有不可壞の力』(Original and indestructible powers of the soil)を有する資本は、此く可變の資本なる可からず。再生産によりて常に回收せられて自存する資本は個々の形態以外別に存するを要す、抽象の資本は之れなり。地代と同じき原則に依て支配せらるゝ利子は、此の不變の資本に對する報酬なり、可變の資本

なるものある可からず何となれば資本は利子を生むものなればなり。故に之れを別に名けて資本財と云ふ。不變の資本が自存以外増收を生ずるは、可變の資本の所得を掠奪するものに非ず。土地に豊否ある如く資本に能否あり、最劣の資本の自存の價を償ふに足る點に於て利子は定る。是れ利子に普遍率ある所以なり。優等の資本は其利子として得る所は自存の價の外に餘剩あり、之れを資本の増收となすと。

予は此くの如く解してクラークの資本不變説を見る可きものなりと信ず、知らず當を得たりや否や。
(四十一年三月二十二日稿)

右一文は明治四十一年四月發行『法學新報』十八卷四號に掲載したるものなり。予は此文と前後して『地代は餘剩なりや』の一文を草せり。利子の普遍率に關連し更に所謂『經濟的地代』なるものに付て推識したるものにして、思路相通するものなれば、今之れを次項に收む。

三 地代は餘剩なりや

地代は餘剩なりや。答て曰く地代も亦た餘剩なり。

地代も餘剩なり。但し同じ前提の下に於ては勞銀も餘剩なり。利潤も餘剩なり。否利子も亦た餘剩なり。

地代は餘剩なりと説くものは『リカルドの地代論』なり。國家學會雜誌二百三十二號山崎博士「地代は全然生産費に含著せられざる乎」拙文「アングラ」參照 其説に曰く、一 土地の生産力は地味地位の異なるに従ひ甚しく異なる。二 然るに一反歩十石の米を生ずる田に産するも、一反歩一石の米を生ずる田に産するも、種類品質等同一なるものは一石の價亦た同一にして、其價の高低は最貧地（例せば一石の收穫ある田）を耕す農夫の生産費即ち最高の生産費を償ふに足る點に於て定まる。三 而して資本の利子勞働の賃銀并に利潤の額は常に

同一率に従ふものにして、十石の田を耕すも、一石の田を耕すも、同額の資本同数の労働者を用ゆるときは之が報酬として仕拂ふ所は亦た同一なり。四 故に十石の田を耕すものは、一石の田を耕すものに比して九石の餘分を生産す。五 此餘分の生産高は妨ぐる事情なき限り、競争の結果として、必ず皆其田の所有者（地主）の有に歸す。六 故に地代は餘剰にして、常に最貧地と其地との收穫の差額に恰當するものなりと。

然るに同じ前提の下には労働も亦た餘剰なり。蓋し 一 労働の生産力は人を異にするによりて甚だ異なるものなり。二 然るに一日百個の帽子を作る職工の生産せる帽子も、一日十個を作るものゝ生産せる帽子も、種類品質同一なるものは、一個の價同一にして、其價の高低は最劣工（一日十個を作る者）の生産費即ち最高の生産費を償ふに足る點に於て定まる。三 而して利子利潤は前項の如く同一額にして、地代は同一地位同一品質のものに對しては、前の結論により亦同一なり。四 故に百個の帽子を造るものは十個の帽子を造るものに比して九十個の餘分を生産す。五 此餘分の生産高は企業主の有に歸せざる限り（而して三により企業家は然かせざるものと前提す）其生産者た

る労働者に賃銀の形に於て仕拂はる。六 故に労働は餘剰にして、常に最劣工と其職工との生産効程の差額に恰當するものなり。

同じき前提の下には利潤も亦剩餘なり。蓋し 一 企業家の能力は人を異にするによりて甚だ異なるものなり。二 然るに同一資本同一労働者数を用ゐて一年十萬個の機械を生産する企業家の製品も、一年一萬個の機械を生産する者の製品も、種類品質等同一なる機械は、一個の價同一にして、其價の高低は最劣企業家（一年一萬個を生産する者）の生産費即ち最高生産費を償ふに足る點に於て定まる。三 而して利子地代労働は前の前提により同一なり。四 故に十萬個の機械を生産するものは、一萬個の機械を生産するものに比して九萬個の餘分を生産す。五 此餘分の生産高は地主が地代として、資本主が利子として、或は又労働者が労働として請求せざる限り（而して三に依り皆然かせざるものと前提す）企業家の有に歸す。六 故に企業利潤は餘剰にして、常に最劣企業家と其企業家との能力の差に恰當するものなり。

利子は餘剰なりとは、一見肯定し難き所なるが如し。一萬圓の資本は如何なる事情の

下にも一萬圓にして、Aの有する一萬圓とBの有する一萬圓とは如何なる事情の下に用ゆるも、其生産上に於ける貢獻常に同一なりとは經濟學根本學理の教ゆる所なり。一既に前提し難し二三四五六は當然皆廢せらる。然れども是れ一見のみ。資本の利率は通説の教ゆるが如く如何なる時如何なる所に於ても常に必ず同一なるものにあらず、(A)金融必迫せる時、金融緩漫なる時、(B)信用發達せる國、信用發達せざる國各々相同じからず。他の事情悉く同一なりと前提して利率に高低ある二つの時、二つの國に同額の資本を用ゆる場合には、高き利率を有する資本は低き利率を有する資本に對し必ず利子に差額あり其差額は之れを認めて餘剰なりとすること決して倣し難きにあらず。然れども予は如此構造論を執るを要せずして、利子は餘剰なりと立證することを得。否予の前提にジョン・ベーククラーフ教授ありて之れを試みたり 但し予が茲に立論する意に要に驅られて之れを爲したり。即ち資本と資本財とを別 Capital and capital goods を設くることは是なり、Clark, Distribution of wealth, p. 118. 猶前文を見よ。 予は今之れを換骨奪胎するのみ。

曰く一 同價額の機械にても其生産効程に甚しき徑庭あり例へば舊式の煙草製造機

械と新式の機械ミュール紡績機械と『リング』紡績機械、『ブッテル』式鋸鐵爐と『ギルクリスト』式鋸鐵爐の如し。二 然るに製品の價は同種同質なれば、一日十萬個を造り出す機械を用ゐると、一萬個の機械を用ゐるとによりて差異あるものにあらずして、其價の高低は最高を生産費(他は總て同一なりとして、最劣等の機械を用ゐたる生産費)を償ふに足る點に於て定まる(若し償はざれば其機械は生産に使用せられざるや論なければなり)。三 而して勞銀地代利潤皆同一と前提す。四 故に十萬個を作る機械は一萬個を作る機械に比し九萬個の餘分を生産す。五 この餘分の生産高は地代勞銀利潤として控除せられざる限り(而して三により然かせざるものと前提す)機械所有者の有に歸す、機械所有者即ち固定資本の供給者は此餘分を利子として受く。六 故に利子は餘剰にして、常に最劣等の機械と其機械との生産効程の差に恰當するものなり。

言ふ勿れ、是れ皆 Reductio ad absurdum の詭辯なりと。近來の所謂最新學派は皆此くの如く地代餘剰説を無限に擴充し行くものにあらずや。其の最も大膽なるものは米國のクラークなり。セリグマンを始め米國新進の學者は皆クラークを仰で宗とするに外な

らず。而してマーシャル教授に至つては、更らに之れを布演して終に『消費者地代説』を主張するに至る。其説に曰く一 同一の價を有する貨物にても、之れを消費する人によりて其與ふる満足の度合は甚だ異なる。二 然るに貨物の價は種類品質同じきものは妨ぐる事情なき限り常に同一にして、最小の需要を有するもの、即ち Marginal purchaser をして之れを買はんと欲せしむる點 (marginal utility) に於て定まる。三 而して其代價として仕拂ふ貨幣は妨ぐる事情なき限り凡ての買手に對して同一の Marginal utility を有す、換言すれば sacrifice は同一なり。四 故に一冊の珍書に對して百圓まで支出せんと欲する人は、十圓まで支出せんと欲せし人に比するときは九十圓の餘分 (之れを surplus utility と稱す) を得るなり。五 此餘分の utility は消費者が其購買によりて得る所なり。六 此餘剰はリカルドの説きたる economic rent と同一のものなり。之れを『消費者地代』と稱する亦妨けずと。

否予は更らに一步を進めて『生産者地代』は勿論『賣手地代』をも同じ論法によりて主張し得るなり。蓋し一 貨幣の utility は人所時を異にするによりて甚だ異なる (A)

貧者の一圓と富者の一圓 (B) 吾人貧書生に對する月初の一圓と月末の一圓 (C) 日本に於ける十圓と英國に於ける一磅の如き然り。二 然るに目下金錢の必要に迫れる商人と巨資を擁する商人と、其賣る所のもの悉く同一なる時は、妨ぐる事情なき限り價に甲乙あることなく Marginal purchaser を満足せしむる點に於て定まること前項の如し。三 而して他の事情は之が爲めに變することなし。四 故に商品を賣りて換へて受くる貨幣に對し、例へば十の欲望を有するものは、一の欲望を有するものに比して九の餘分満足を得可し。五 此餘分は他に妨ぐる事情なき限り (見切賣捨賣賣崩し賣倒され等の如き、而して三に依り、之れなきものと前提す) 皆賣手に歸す。六 此餘剰は消費者地代と相對して、之れを『賣手地代』と稱する亦妨けず。

言ふ勿れ、是れ詭辯を重ねる petitio principii なりと。マーシャル教授自ら屢々 marginal utility of money を説き、獨逸の學者亦 Dringlichkeit des Geldbedarfs を以て價格成立の一原因と爲すにあらずや (ブレンタノ教授、ヘルマンに従つて既に久しく此論を主張す)。故に曰く、地代も餘剰なり、然れども、勞銀も餘剰なり、利潤も餘剰なり、利子も餘剰なり、

否賣手の貨幣より受くる満足、買手の買物より受くる満足も亦皆悉く餘剰なりと。然らば即ちリカルド地代論は破れたるか。曰く未だし。

リカルドが地代のみを以て餘剰なりとしたる猶一の場合あり。同一地にても耕作の進歩に伴ひ亦餘剰を生ず此餘剰は即ち地代なりと説く是なり。曰く人口増殖し未耕地なきに至れば更に既耕地に就て穀物の増穫を圖らざる可からず。然るに一定の限度までは其増穫は増費（資本及勞働の）と比例を維持す可しと雖も其以上は遞次其比例を減す可し。是を收穫遞減の法則と云ふ。收穫遞減の法則は言ひ換ゆれば生産費遞増の法則なり。生産費遞増とは最高の生産費と稱するものゝ遞増することを言ふなり（凡ての生産費の遞増に非ず）。最高生産費高まれば之れによりて定めらるゝ穀價は亦た騰貴す。穀價高まれば最劣等地以外の他の土地の収益之れに應じて増加す（收穫は異ならざるも之れを貨幣に換へたる額多きが故）。此の増収益は亦た競争の結果として他に妨ぐる事情なき限り皆土地の所有者即ち地主の有に歸す。即ち此場合に於ても地代は亦た餘剰なりと。

然れども同じ前提の下には勞銀も、利子も、利潤も亦た皆同じく餘剰なり。故に残る問題は收穫遞減の法則は土地のみに行はれ、資本勞働企業に及ばざるや否や是れのみ。而して近來の通説は收穫遞減の法則は土地のみに行はるゝものにあらずして與へられたる條件の下には普く行はるゝものなるを主張するに於て一致す。而して又收穫遞増の法則なるものも一般に存すと認めらる。土地の收穫はリカルド以後今日まで大體に於ては減少せずして却て著しく増加したる事は誰人も否定するを得ざる現成の事實なり。然らば地代のみが餘剰なりとの主張は到底之を維持す可からざるを知る。近來の「レント」論流行は即ち此結論を確保する鐵案に非ずや。（三月二十日記す）

右一文は明治四十一年四月發行「國家學會雜誌」第二百五十四號に掲載したるものにして、眞意は元より地代は餘剰なりとする説を否定するにあり、唯だ慣用の論法を倒用して通説の論理的缺陷を暴露せんと試みたるものなり。予が目下採る所の説は、利潤即ち餘剰にして、他の所得は皆一度費用として計上せらるゝものなれば、之を餘剰と見る可からずと云ふにあり。マルクスより出でゝマルクスに歸り、リカルドより出でてリカルド

に歸る。讀者は予が『續經濟學講義』第一編第五章「餘剩價值と利潤」(本全集第一集第八二三頁以下)に就て專説の大意を看取せられんことを希望す。

四 マーシアルの利潤論とマルクスの

平均利潤率論

平均利潤率 Durchschnittsprofitrate はマルクスの學説に於て最重要の地位を占むる理論にして、亦其學説の最弱點と看做さるゝ所なり。されば凡そマルクスの學説殊に其價值論を論評せんと欲する者は皆先づ指を其平均利潤率論に染むるなり。マルクス謂らく餘剩價值は可變の資本に伴ふて増減し不變の資本の多少に拘らず。而して不變可變兩資本の割合如何に變動すとも利潤率は常に同一なりと。マルクスは左の設例を以て此理を説明す。前文と重複すれども姑く之を存す。

序	資本	餘剩價值率	餘剩價值	利潤率	消費資本	商品の價值
I	80c+20	100%	20	20%	50	90
II	70c+30	100%	30	30%	51	111
III	60c+40	100%	40	40%	51	131
IV	85+15	100%	15	15%	40	70
V	95+5	100%	5	5%	10	20

第一例は不變資本八十と可變資本二十とを以て生産に従事する場合、第二例は不變資本七十と可變資本三十とを用ゆる場合、以下之に準ず。

餘剩價值の可變資本に於ける割合は常に同一なりとはマルクスの前提する所なり。

故に之れを示すに均しく百分の百を以てす。

仍て生ずる所の餘剩價值は 一 可變資本二十の場合には二十 二 同三十の場合には三十等、以下之れに準ず。

今此く生じたる餘剩價值は實際生活に於ては單に可變資本に對する割合を以て計算せられず、生産に使用したる資本總額(此例に於ては之れを百と假定せり)即ち可變不

變資本の合計額に對する割合を以て計算せらる。故に

I の場合には	百に對する二十	即ち	20%
II "	"	"	30%
III "	"	"	40%
IV "	"	"	15%
V "	"	"	5%

となること右表第四欄の如くなり。

マルクスは主張すらく生産品の中に含まるゝ資本の割合は使用せられたる資本の總額に非ずして資本中消費せられたる部分に限る。而して其消費額の割合は決して一定せず生産の種類に從て各異なると。即ち此例に於ては

I は	百中	五十
II "	"	五十一
III "	"	五十一
IV "	"	四十
V "	"	十

と假定す。

而して商品の價值は 一 消費せられたる資本額 二 可變資本額 三 餘剩價值の三者より成るものなり。

故に左の如き結果を得。

	消費資本	可變資本	餘剩價值	商品價值
I の場合	50	+	20	= 90
II "	51	+	30	= 111
III "	51	+	40	= 131
IV "	40	+	15	= 70
V "	10	+	5	= 20

然るに生産費は可變資本と消費資本とより成るものなり（即ち商品價值より餘剩價值

を控除したるものに當る)。従て左の如くなるを知る。

I	50+20=70	II	51+30=81	III	51+40=91	IV	40+15=55
V	10+5=15						

然るに今此五種の生産業を一括して之れを見るときは

資本總額 百の五倍即ち 500

生じたる餘剩價值 20+30+40+15+5 = 110

商品價值合計 90+111+131+70+20 = 610

にして可變不變兩資本の合計は $390c+110v=500$ となり、之れを百分率を以て言ひ表はすときは $78\%c+22\%v=100\%$ となる可し、而して可變資本 22% なるにより、之れより生ずる餘剩價值は資本總額百に對し二十二なる可きは前提により自ら明かなり。

而して商品の價格(賣價)は如上の生産費と此餘剩價值との合計より成る事左の如し。

生産費	餘剩價值
I 70 +	22 = 92

II	81 +	22 = 103
III	91 +	22 = 113
IV	55 +	22 = 77
V	15 +	22 = 37

従て商品の價格と其價值との差額は左の如くなる可し。

I	92-90= +2	II	103-111= -8	III	113-131= -18	IV	77-70= +7
V	37-20= +17						

今此差額を合計すれば $2+7+17=26$ $8+18=26$ 即ち $+26-26$ にして正負相殺するを知る。即ち全體の通算の上に於ては價格と價值とは差額を止めざるを見るなり。換言すれば價格と價值との間に差額あるが如く見えたるは個々の場合に於て然るものにして全體に就て之れを見れば此くの如き差額は存することなきなり。茲に於てか囊の 13% なるものは、平均利潤率なることを知り得たりと。之れをマルクスの平均利潤率論の大要とす。

此理論に對しては駁撃を試むるもの甚だ多く、今日に於ては殆んど完膚なきの狀あり、然れども予輩は今本論に於ては、論者の群に投じて其論評を試みんと欲するものにあらず。唯マルクスに寸毫も關連なく、其學說の影響は殆んど全く被むらざるが如くなるマールシアルが、其著經濟原論に於て叙述する利潤論 (Principles, 5. E. Profits of Capital and Business Power, pp. 596—628) が其實に於て、以上のマルクスの所論と相渉る點甚だ尠からざるを覺へたれば予輩が見る所を陳じて後の識者の判別を俟たんと期するのみ。

マールシアル曰く『企業の利潤を支配する原因は、最近五十年に至るまでは十分に研究せられたることなし。古への經濟學者は利潤を構成する要素を適當に分別せずして單に平均利潤率を支配する單純なる一般の法則を求むるに急なりき。此の如きは其性質上到底存在するものに非ず。是れ彼等の貢獻する所甚だ尠かりし所以なり』と。然らばマールシアルが意を用ゐて分別せんことを試みたる利潤構成の要素とは何ぞや。予輩を以て之れを見るに、マールシアルが前後數十頁を費して爲したる所は、利潤の中に包含せらるゝ勞銀 (勞働に對する報酬) 種々あるを指摘したること之れのみ。

マールシアルは第六卷第七章に於て曰ふ、企業の成功は最終の能力に依るよりも直接の能力による。即ち遠大の發明等に力を注ぐものは利潤却て少く、既存の技術を應用し市場の目前の需要に應ずるもの多き利潤を得。利潤の真相を得るには、先づ半企業的職分を帯びたる勞働者 (職工長の如き) と通常勞働者との所得を比較研究すべし、次に此等職工長及賃銀を受けて働く支配人と眞正獨立の企業者とを比較す可し。更らに進んで小企業主と大企業主との所得を分解研究す可し。又自己資本を以て企業するものと借入資本を以て企業するものとの差違を見る可し。次には個人企業と會社企業とを比較せよ。而して終に曰く、『近世企業の組織は大體に於て利潤をして其業の難易に應じて増減せしむる強力なる傾向を有す』。唯企業の所得は勞銀に比して其真相を外部より窺ふこと甚だ困難なるが故に、後段利潤統計論を参照せよ 此傾向の實際の作用を計數的に立證すること能はざるのみ。而もそれは多く個人の場合に限れり、企業種別全體に涉て之れを見るときは此の均一的傾向の儼乎として存すること毫も疑を容る可からず。而して企業者天稟の差より起る利潤の高低は、大體に於て勞働者の技能と否とにより勞銀に高低ある

と其理毫も異なる所ある可からず。而して常率以上の所得あるときは需要供給の理により之れを得んとするもの増加して其所得を低落せしめ、反對の場合には減少して所得を昂騰せしむること亦勞働の場合と相分つ所を見ずと。

更らに第八章に於てはマーシアルは主として小企業の利潤常に大企業に比して多きは眞正なる利潤以外勞銀の要素を含むが爲めなるを細論絮説することアダム・スミスに同じく、進んで *per annum* 利潤率と *per turnover* 利潤率とは全然區別す可きものなるを述ぶること周到なり。曰く、*per annum* の利潤率は企業の勞務資本額に割合して多き業に多く其反對は反對なり。而して又た

一 此企業勞務は固定資本額の大小よりも流通資本額の大小によりて輕重す。固定資本多きも流通資本少きときは勞務少く、固定資本少きも流通資本多きときは此勞務多し、從て利潤は前者に少く後者に多し、會社企業の利潤少く個人利潤の多き原因の一は茲にあり。

二 固定流通兩資本の割合同じ業にありては勞銀に仕拂ふ所 (*wages-bill*) 及材料 (*stock-*

in-trade) が製品の價格に比して多き業企業の勞務重く從て其企業利潤の率高し。其一段の末尾に之れあり曰く

In trades in which the speculative element is not very important....., the earnings of management will follow pretty closely on the amount of work done in the business, and a very rough but convenient measure of this is found in the wages-bill.

投機的要素少き企業に在りては利潤は殆んど精密に企業の勞務に比例す。而して之れを概略して勞銀仕拂額に準じて高低するものと云ふも妨なかる可し。

又進んで曰く

And perhaps the least inaccurate of all the broad statements that can be made with regard to a general tendency of profits to equality in different trades, is that where equal capitals are employed, profits tend to be a certain percentage per annum on the total capital, together with a certain percentage on the wages-bill. (p. 614)

思ふに各種異なる企業に於ける利潤の均一的傾向に就て下し得る最も限少き斷論は次の如くなる可し。曰く同一の資本を用ゆる企業に在りては利潤は總資本額に比例す

る毎年の一定率に、賃銀支拂額に對する一定率を加算したるものは是れなり
 更に又 Per turnover の利潤率に就ては云つて曰く

We see then that there is no general tendency of profits on the turnover to equality; but there may be, and as a matter of fact there is in each trade and in every branch of each trade, a more or less definite rate of profits on the turnover which is regarded as a "fair" or normal rate. (p. 616)

一取引毎に見たる資本の利潤に於ては均一に歸著する傾向ありと云ふを得ずと雖も、而も各業に於て、又各業中の各種に就て、多少定りたる利潤の率ありて公正又は常準利潤率と稱するを得可きことは可能事にして、又事實に徴して見得る所なりと。

予輩は今マーシアル利潤率の全體に就て論評を企つるにあらずるが故に、更に多く引例を加へて讀者を煩はすことを爲さざる可し。以上示したる所を以て優に其のマルクスの平均利潤率論と骨子を共に有する者なるを明かにし得たりと信ず。試にマーシアルの固定資本を以てマルクスの不變資本に換へ其流通資本を以て可變資本に代へよ *costs* の結合は立所に成る可し。試にマーシアルの賃銀仕拂額 *wages-bill* を以てマル

クスの餘剩價值に當てよ、餘剩價值率は勞せずして出で來る可し。マーシアルが其利潤論を先づ勞銀との比較に發端せしむるは是れ全然マルクス掌中の物にあらずや。小企業と大企業との差違を勞働の構成要素の多少に歸するは、マルクスの可變資本即生産増加要素論と異曲同工に出づるものに非ずや。予輩の觀る所は斯の如し。知らずマーシアルとマルクスと妄斷を以て予輩を罪する無きや否やを。(四十二年二月二十三日記す)

右一文は四十二年三月發行「法學新報」十九卷三號に掲載したるものにして、説いて亦ならざるは甚だ愧づる所なりと雖も、マーシアルが利潤を以て勞銀總額に準じて高低すと云ひ、又は總資本額に比例する毎年の一定率と勞銀仕拂額の一定率との合計に歸著する傾向ありと云ひ、而して各業に於て、又各業中の各種に就て公正又は常準利潤率と認む可きものありと説く所は、前文に紹介したるマルクスの平均利潤率論と著しく趣向を同ふするものにして、マーシアルの固定資本流通資本の説明も、亦マルクスの不變可變資本の論に類似したる處多きは、予が注意を喚起したる所以なり。而して後にアダム・スミスの説を考ふるに及んで、其依つて出づる所はスミスに在るものと云つて大過なきを覺へたり。乃ち其考案を次文に開陳したり。

五 マルクスの不変・可變資本とアダム・スミス

の固定・流通資本との關係

マルクスが唱へ出したる不変・可變兩資本の説は、近來クラークが主張する資本と資本財との區別に關する新説と共通の點を有するものなることは、前文『不變の資本・可變の資本』に一考を試みたる所の如し。而してボエム・バヴェルクは嘗てマルクス説を排斥したる *Capital und Capitalisms*, I. S. 495-538, 并に *Zum Abschluss des Marxschen Systems*, 英譯あり、*Karl Marx and the close of his system*, と題す。が如く又クラーク説を打破するに力を餘さざるは *Quarterly Journal of Economics* 誌上、當然にして、バヴェルクに於ては其論理一貫して渝らざるを知る。予は全然反對の立場に立つ。マルクスの不変・可變

資本の別が學理として尙ぶ可きが如く、クラークの資本・資本財の別も亦た捨つ可からざる一面の眞理を含むものなりと信ず。而してマーシアルに至りても用ゐる言葉こそ異なれ、内容に於てはマルクスの説に採る所多き所以は、前文『マーシアルの利潤論とマルクスの平均利潤率論』に於て立證を試みたり。予は更に一步を進めて、マルクスの不変・可變兩資本論とアダム・スミスの固定・流通資本論との間に共通の點の存するを見出し得可しとの結論に達せり。以下私考の主要を述べて前諸文と共に先覺の教を乞はんとす。希くは予がマルクス研究に於て多少の得る所あらん。

二

マルクスは財の流通を左の二形式を以て説明す。

一貨物——貨幣 $W—G$ 二貨幣——貨物 $G—W$

一貨物——貨幣。物を賣る場合なり。二貨幣——貨物。物を買ふ場合なり。

今二者を結合すれば、一貨物——貨幣——貨物となる可し。人に就て云へば、賣手——

貨幣——買手を以て表はすを得。此反對の結合は、二貨幣——貨物——貨幣にして、人に就て見れば買手——貨物——賣手となる。

而して一の場合に於ては貨幣は一定量にして、貨物は二の異なる者より成る。例へば小麦一石を賣りて金五圓を得、其五圓を以て布三尺を買ふが如きを云ふ。此場合小麦の賣手と布の買手は同一人（甲）にして、其他には小麦の買手（乙）と布の賣手（丙）とあり。二の場合に於ては貨物は一定物にして、貨幣は二の異なる額より成る。例へば金五圓を以て小麦一石を買ひ、此一石の小麦を賣りて金六圓を得るが如し。此場合小麦の買手（甲）は同時に其賣手たり、其他には小麦の第一次的賣手（乙）と第二次的買手（丙）とあり。即ち何れにしても人に就て見れば三方あるのみ。物に就て見れば四方あり。稱呼四にして契約當事者は三なり、其中一人必ず二回關與す。Il y a donc quatre termes et intervient deux fois le Troisième. 従て一の場合は性質の變化と名け、二の場合は分量の變化と名くるを得可し。性質の變化とは物を異にするを云ひ、分量の變化とは貨幣額を異にするを云ふ。

貨幣額を異にすと云ふは取も直さず價值の増進を意味す。即ち一の場合には

$$W^1 - G - W^2 \text{ なるが故に } 價值より見れば \quad W^1 = G \quad G = W^2 \quad \therefore W^1 = W^2 \text{ なり。然}$$

るに二の場合には $G^1 - W - G^2$ なるが故に價值の上より云へば W は買ふ場合（ G^1 ）より賣る場合（ G^2 ）の方大なり。其差は即ち餘剩價值なり。即ち

$$G^1 + m = G^2 \quad G^2 - m = G^1 \quad (m \text{ は餘剩價值})$$

となるなり。

此餘剩價值（ m ）は如何にして生ずるや。マルクス答て曰く、可變資本の働によると。

三

不變の資本は常に其自らを回收するのみ、額に於て變化なく、形態に於て變化あるのみ。可變の資本は之に反し、形態に於ても額に於ても常に變化す。不變の資本は其價值常に一定不變なり、可變の資本は必ず其價值を變ず。生産に投下する資本が生産費に該當する價值を生ずるは、不變の資本の全部若くは其消費せられたる部分を回收再生産するも

のなり。生産費を償うて猶收益あるは、可變の資本が餘剰價值を生産したるものなり。故に可變の資本を用ゐる比例多き程收益の割合亦た多し。例せば左の如し。

不變資本	可變資本	全資本	餘剰率	餘剰收益	利潤率
60	+	40		100	100%
20	+	80		100	100%
80	+	20		100	100%
100	+	0		100	100%
0	+	100		100	100%

故に曰く、利潤の生ずるは可變資本の働による、可變資本の共働せざる不變資本は利潤を生ずることなしと。

四

マルクスは其遺著『餘剰價值學說論』第一卷にアダムスミスの餘剰價值論を論ずる

詳なり。アダムスミス曰く

The value which the workmen add to the materials resolves itself in this case into two parts, of which the one pays their wages, the other the profits of their employer upon the whole stock of materials and wages which he advanced. Edition Cannan I. P. 50.

労働者が原料に増し加ふる價值は此場合二の部分に分解せらる。一部は労働者に賃銀として仕拂はるゝものにして、他の一部は豫め支出したる原料及び賃銀の全額に對して雇主（企業者）に支拂はるゝ利潤是なり

マルクスは之を解説して曰く、『製品の販賣によりて得る利益は販賣其自らより生ずるにあらず、又其品を其の價值以上に賣るに依るにあらず、即ちスチュアートの所謂 Profit upon alienation に非ず。労働者が原料に附加する價值は二部より成る。一部は勞銀に充てらるゝものにして、勞銀の態に於て受けたる丈の價值の分量を還附するものなり。一部は即ち資本主の利益となるものにして、資本主は其價を仕拂はずして、賣りて己れの有となす所のものなり。……是に依りてアダムスミスが餘剰價值發生の眞原因を看破したるものなるを知る可し云々』と。

右書百四十、百四十一頁 換言すればスミスはマルクスと同説を

執るものなり。然らば右餘剰價值發生の原因に關するアダム・スミス説は、果して那邊より出で來れるや、マルクスは何れの處に於ても一向論及する所なし、是れ予が茲に解答せんとする問題なり。

五

アダム・スミスは第二卷第一章に於て資本の分類を論じ固定流通の別を立て、之を説くこと詳なり。曰く資本を使用して收益 *revenue or profit* を生ずるに二法あり。一は耕作製造賣買に用ゆることなり。此場合には其資本が所有者の手に留るか、又は其形態を變ぜざるときは、何等の利益を生ずることなし。即ち資本として用を爲さんとするには必ず變形變有するを要するものにして、之を流通資本と名く。二は土地の改良其他所有者の手を代ふることなく、又流通することなくして利益を生ずる機械器具の購入に充ちるものを云ふことを固定資本と名く。産業の種類を異にするにより此兩資本結合の割合は甚しく異なり。(Different occupations require different proportions between the fixed and circu-

lating capitals employed in them.)

マルクスは資本論第一卷に左の如く云へり

Der Teil des Kapitals also, der sich in Produktionsmittel, d. h. in Rohmaterial, Hilfsstoffe und Arbeitsmittel umsetzt, verändert seine WerthgröÙe nicht im Produktionsprozess. Ich nenne ihn daher konstanten Kapitaltheil, oder kürzer: konstantes Kapital.

Der in Arbeitskraft umgesetzte Theil des Kapitals verändert dagegen seinen Werth im Produktionsprozess. Er reproduziert sein eignes Äquivalent und einen Ueberschuss darüber; Mehrwerth, der selbst wechseln, gröÙer oder kleiner sein kann. Aus einer konstanten GröÙe verwandelt sich, dieser Theil des Kapitals fortwährend in eine variable. Ich nenne ihn daher variablen Kapitaltheil, oder kürzer: variables Kapital. (I. S. 171.)

生産要具即ち原料補助料及労働要具に投下せらるゝ部分の資本は、生産經過中に其價值の大きさを變ずることなし。之れを不變の資本分、略して不變資本と云ふ。之に反し、労働力に投下せらるゝ部分の資本は、生産經過中に其價值を變ず。即ち自己に均しき分を生産するのみならず、猶其以上に餘剰を生ずるものなり。此餘剰分は亦可

變的にして或は大に或小なり。此部分の資本は不變の大より絶えず可變の大となる。之れを可變資本分略して可變資本と云ふ

而して第三卷に於て曰く

Wir haben also gezeigt: dass in verschiedenen Industriezweigen, entsprechend der verschiedenen organischen Zusammensetzung der Kapitale, und innerhalb der angegebenen Grenzen auch entsprechend ihren verschiedenen Umschlagszeiten, ungleiche Profitraten herrschen, und dass daher auch bei gleicher Mehrwerthrate nur für Kapitale von gleicher organischer Zusammensetzung das Gesetz gilt, dass die Profite sich verhalten wie die Grössen der Kapitale in gleichen Zeiträumen gleich grosse Profite abwerfen. (III. S. 131-2.)

吾人の所説を要言すれば、各異れる産業に於て、資本の有機的結合、不變・可變資本の割合、及び同一結合にても、資本の運轉時間の長短異なるに従ひ、利潤率は同一なるを得ざることを、而して其結果、利潤は資本の多寡に比例し、同一時間には同一の利潤を生ずて、原則は、餘剩價值率に變化なき場合たりとも、猶ほ有機的結合の割合同一なる資本に就てのなりはるゝことはなり

今兩者の所説を對照するに、スミスの固定資本と云ふものは、マルクスの不變資本に該

當し、流通資本と云ふものは可變資本に當る。而して業の種類に従ひ、此資本結合割合の同一ならざるを認むること兩者亦相同じ。

アダム・スミス又た曰く

That part of the capital of the farmer which is employed in the instruments of agriculture is a fixed; That which is employed in the wages and maintenance of his labouring servants, is a circulating capital. He makes a profit of the one by keeping it in his own possession, and of the other by parting with it.

農夫の資本中農耕要具に投下せらるゝものは固定資本なり。其労働者の賃銀並に生活の料に供へらるゝものは流通資本なり。一は之を所有するによりて利を生じ、一は之を割讓するによりて利を生ず

と。即ちマルクスの労働要具と云へると其意全く同じきを見る可し。

六

然らば此兩資本の利潤に於ける働き如何。アダム・スミスの此問に答ふる一節は、マル

クス説と其意を全く同ふするものなるに、マルクスは一言も此に論及せず、又從來の學者嘗て茲に注意せず。

スミス曰く。

Every fixed capital is both originally derived from, and requires to be continually supported by a circulating capital. All useful machines and instruments of trade are originally derived from a circulating capital, which furnishes the materials of which they are made, and the maintenance of the workmen who make them. They require too a capital of the same kind to keep them in constant repair.

No fixed capital can yield any revenue but by means of a circulating capital. p. 265-6.

固定資本は總て元來流通資本より生じ、又絶へず之によりて維持せらるゝものなり。機械器具は皆流通資本より傳來し、流通資本より其所要の原料を得。其機械器具を働す勞働者の生活を維持するものも亦流通資本なり。而して機械器具を常に生産用に供し得可く維持するも亦流通資本の力に依るなり。即ち凡そ如何なる固定資本と雖も、流通資本の助あるに非ざれば何等の収益を生ずることなし

即ち固定資本其自らは収益 revenue or profit を生ずることなし。流通資本之に加はりて始めて収益てふ餘剰生ずと主張するものにして、マルクスが可變資本のみ獨り其自らを回收する以上に餘剰分を生産するものにして、餘剰價值率は常に可變資本の多少に比例すと説くと、寸毫も異なるあるを見ず。餘剰價值を以て勞働の働きに歸し、流通資本を以て餘剰發生の原因なりとするアダム・スミスが流通資本の内容を列舉するに、主として勞働者の生活維持資料に重きを置く敢て怪むに足らざるを知る可し。

七

アダム・スミスの流通資本とマルクスの可變資本との間に存する共通の點誠に斯くの如し。然らば此兩者は全然同一物なりや。答て曰く否。

アダム・スミスは其流通資本の内容を列舉して左の如しとせり。

一貨幣 二賣手の手にある在荷 三原料 四商人又は製造者の手にある製品、マルクスの可變資本は勞働力に投下せらるゝもの、即ち勞働者の生活を維持するものに限る。

五

マルクスの不變・可變資本とアダム・スミスの固定・流通資本との關係

201

然らば兩者の間殆んど何等の關係なきが如し。此矛盾は如何に之を説明す可きや。
 アダム・スミス曰く

The most useful machines and instruments of trade will produce nothing without the circulating capital which affords the materials they are employed upon, and the maintenance of the workmen who employ them. Land, however improved, will yield no revenue without a circulating capital, which maintains the labourers who cultivate and collect its produce.

To maintain and augment the stock which may be reserved for immediate consumption, is the sole end and purpose both of the fixed and circulating capitals. It is this stock which feeds, clothes, and lodges the people. Their riches or poverty depends upon the abundant or sparing supplies which those two capitals can afford to the stock reserved for immediate consumption. p. 266.

最も有用なる機械及營業要具と雖も、其用ある原料を供し、之を用ふる労働者の生活を維持する所の流通資本なければ何物をも生ずることなし。如何に改良を施したる土地

にても、之を耕作し其産物を収集する労働者を支ふ可き流通資本なければ何等の收入を生ずることなし。

最終消費の爲に保留せらるゝ元資を維持し増大するは、固定・流通兩資本の唯一の歸趣にして目的なり。是れ即ち人民に衣食住を供する元資なり。されば人民の貧富は最終消費の爲に保留せらるゝ元資に、固定・流通兩資本が加ふるものゝ多きか少きかに依るものなり。

是によりて觀る、スミスの流通資本は

一 其自らを回収するに止るもの 二 其自らを回収するの外猶餘剰を生ずるものを含み、マルクスの 一 消費せられたる不變資本の部分 二 可變資本の全部の二者を併稱するものなり。さればスミスが revenue と云ふは、其實自己回収分即ち資本利子をも含むものにして、マルクスの所謂餘剰價値の外生産費をも合せ云ふものなり。

然らばスミスは其自らを回収する外猶餘剰を生ずるものを労働者生活維持資本のみに限るや、此點甚だ明瞭ならず。流通場裡に入るによりて利潤生ずと爲すものなりや。或は又た所謂生産なる経過を経ざれば餘剰生ぜずと爲すものなりや。マルクスは此後

者の見解をスミス説に下すと雖も、予は此見解に與せず、前者を探らんとするものなり。而して又他方に於てマルクスは利潤を説明するに、常に勞働餘剩價值説のみを以て一貫するやと云ふに、ボエムバヴェルクの明示したる如く平均利潤率の謎の解答は終に再び生産費説に立戻らざれば之を下すを得ず。前文に説きたり即ち兩者は立論の出立點に於ては相反對するが如くなり、雖も最終の解決に至りては、兩々相接近し來りて、殆ど分つ所なきに至れり。換言すれば、勞働價值説より出立したるマルクスは、終に生産費價值説を以て纔に其の平均利潤説を維持せざる可からざるに至れるものにして、アダム・スミスは始より單純なる勞働價值説を執らざりしが故に、終始一貫の議論を立つるを得たるなり。

『續經濟學講義』（本全集第一集第七九六頁以下）第一編第四章參照。

八

以上説く所極めて大要に過ぎずと雖も、アダム・スミスの固定流通資本の説と、マルクスの不變可變兩資本の説とは偶然的一致を有するのみならず、系統的に共通の思想の上に

立つものなるを明かにし得たりと信ず。

抑も不變可變資本の説は、マルクスの餘剩價值論を支ふ可き主柱にして、餘剩價值論はマルクスの全經濟學説の根本的觀念なり。故に其學説破らるゝときは、マルクスの經濟學説は非常なる打撃を被るものと云はざるを得ず。然るに固定資本・流通資本の説はアダム・スミス以來一の取除なく凡ての學者の祖述する所にして、殆んど不可拔底の斯學の定理なり。而して兩者が根柢に於て同一の思想より生じ來れること、右に私考を下したる所正當なりとせば、マルクス説の破壊は未だ遽かに之れを論ずることを得ざるや言を須たず。然るに現時大多數の學者は不變可變資本の論は殆んど全く之を捨て、顧みず、恩師ブレンダフ先生猶其説を非難して取る可からずと主張せらる（經濟學講義）。他方に於ては固定流通資本の論は殆んど寸毫を容る可き餘地なき公論と認めらる。予聊か不平なき能はず。『流通資本の助なくしては、固定資本は何等の收益をも生ずる能はず』の一句をアダム・スミスより復活し、之れを以てマルクス研究に一步を進め得可しとの私説を茲に公にす。其意必しもマルクスの爲に辯ぜんが爲にあらず、抑も亦アダム・スミス

五

マルクスの不變・可變資本とアダム・スミスの固定・流通資本との關係

も誤解せられ忘却せらるゝもの少からざるを慨きてなり。ボーナー曰く『大家とは其書の讀まれずして却て曲解せらるゝものゝ謂なり。斯學の定論は貨幣の如し轉輾流通終には其發行者の刻印磨消するを常とす』と誠に至言と云ふ可し。識者若し説あらば希くは示教を惜む勿れ。(四十二年五月十六日記す)

右一文は四十二年六月『國民經濟雜誌』六卷第六號掲載の同題文中(八)の一節を抹殺し(九)を繰上げて(八)としたるものなり。在獨の學友左右田喜一郎氏は右に對し辭言を寄せて予が論を取る能はずと云はる。但し其理由の詳細に至つては不幸にして教を得る能はず。爾來熟考を重ねて(八)の一節は之を捨つの可なるを認めたれども其他に至りては今日に至りて舊時の宿論を改む可き所以を見ず。而して『續經濟學講義』(第一集收錄)に於ては更に少しく管見を進め置きたり併せ讀まれんとを請ふ。

六 企業倫理論

—Die Ethik untersucht, was der Mensch, namentlich in seinem Verhalten zum Menschen, dem Menschen, wert ist. A. Menzong, Psychologisch-ethische Untersuchungen zur Werttheorie. Graz. 1894. S. 219.

—Soweit der Arbeitsprozess nur ein blosser Prozess zwischen Mensch und Natur ist, bleiben seine einfachen Elemente allen gesellschaftlichen Entwicklungsformen desselben gemein. K. Marx, Das Kapital. Bd. III. Th. II. Hamburg 1894. S. 420.

—La périodicité des crises est donc ici, aux yeux de Marx, une raison de croire que ces oscillations rythmiques des prix attestent l'autonomie du mouvement évolutif de la valeur, indépendamment des désirs et des options de l'homme, des calculs du producteur et des besoins du consommateur. Tardé. Psychologie économique. T. 2. Paris. 1902. P. 204.

一 『價值革命』の解

貸借的世界觀が近世倫理の根柢を形成するに二様の意義あり。近世倫理の人格發展自我實現の要求は貸借的世界觀を得て始めて架空ならざるを得たること其なり。倫

理の要する所亦價值現象に外ならず、價值の人と人との間に於ける關係の或は『貸』となり或は『借』となるは要するに倫理的判斷に於て『人が人に對する行爲に於て人に對するの價值』(マイソングの言)が其根柢たること其二なり。然り故に貸借は斯の如く倫理的意義を外にして存し得可からざるなり。人が人に對して價值あらざる可からざるを『借』と呼び、人が人に對して價值あれと要求し得るを『貸』と稱す。獨語の *Soll* と *Haben* とは能く此理を表示す。『*Soll*』とは人に對して價值を負ふ(即ち在なり)を云ひ、『*Haben*』とは人をして價值あらしめ得る(即ち有なり)を云ふ。而して此の價值は必ず貨幣の單位稱呼によりて顯はされ所謂勘定科目の表題の下に對立す。

貸借的世界觀に基く社會は又『高』*Hausse* 及『低』*Baisse* の二 Tarde, Psychologie économique. Tome 2, p. 189 et seq. に於て其合計を顯はす。近世の社會運動は凡て『價值現象の革命』*Revolution von Wertungen* なりと思惟せるマルクスの意は必ずしも此に到らざりしと雖も之れを解する此の如くして初めて架空の言たらざるを得。個々の『*Handlung*』個々の取引に於て必ず貸と借とを確定し之れを明確精密なる貨幣の稱呼によりて表はし、而して勘定科

目の介立を要して他日の紛亂を豫防するが企業時代の特徴なるを知る。而も『此個々に於て正しく』動搖を容れざるが如く見ゆる貸と借との平均は、之れを合計して長期に涉り包含難多なるときは、茲に『*Ours*』と『*Bears*』との現象を生ず、之れを名けて *Revolution von Wertungen* と云ふは個々の價值の擾亂を指すにあらず、又貸借相對の破壊を意味するものにあらず(萬國動産價值保護同盟の目的とする所の如き)。又は之れを集めて勘定科目以上の勘定科目を作る時、『*Barans* スアツカウント』貸借對照表と云ふが如き)を云ふにあらずして、如此勘定科目の桎梏を超越する處に就て云ふものなり。佛國の哲學タルドはハーバートスペンサーが凡ての社會現象を韻律を以て説明し得可しとするを以て謬れりとし、更にマルクスに關連して經濟生活に於ける『*Ours*』と『*Bears*』を以て *loi de l'opposition économique* を證明し得可しとなす Tarde, a. a. O. 之れを世上の學者が *Compensation* 若くは *Polarity* 等の淺薄なる命題を提出して論ずるに比するときは、優に一頭地を抜くものありと雖も、*Opposition* と云ひ *Adaptation* と云ふが如き *Schlagwort* を用ゐ、單に外觀上の分界を施して已むは未だ以て其真相を闡明し得たりと云ふ可からず。予

は『オース』と『ペース』とを以て波濤の一去一來に譬ふるを拒むものにあらず。何となれば波濤の一去一來は其自身に於て盡き了るものにあらずして其去るも來るも共に一定の歸趣より見れば相共に善きものなればなり。經濟上に於ける『高』と『低』とは相反對せる兩端なりと見るが如きは淺薄迂愚の甚しきものなり。『オース』と『ペース』との一去一來の積層して生ずる現象は即ち價值革命なり。而して價值革命は畢竟するに人格發展自我實現の要求の上より見れば向上的發展を伴ふか又は之れを喚起するか相互に原因となり結果となるものなり。恐慌の眞の意義は此に想到して始めて闡明せらるゝを得。クルド曰く

.....Le marché est, avant tout, dominé par des influences psychologiques, par des actions mentales dont le courant traverse en même temps tous les cerveaux, et à partir de quelques esprits qui ont des raisons sérieuses d'être découragés ou remplis d'espoir, propage leur découragement ou leur confiance bien au-delà de leur groupe, dans tous les groupes de la Bourse, affaires, fiévreux, éminemment aptes à exercer et à subir les contagions de ce genre. Psychologie écono-

mique. Tome 2, p. 197.

と。他を浸染する心理的影響に依つて支配せらるゝ市場と云ふは氏が得意の題目たる Milieu 論と相關連して興味あり。ジューダラーの所説 C. Juglar, Des crises commerciales et leur retour périodique en France, en Angleterre et aux Etats-Unis. 2^e Ed. 1889. の如きに勝る萬々なりと雖も、終に恐慌の眞意を極めて之によりて近世

企業時代の企業發生前期と相分つ所以に説き到る能はざるものならずんばあらず。他を浸染し影響し依て以て一定の經濟上の『ミリュール』(中心)となり得る所以は、即ち恐慌の必ずしも所謂病的現象にあらずるを證するものにあらずや。恐慌は近世企業生活を危うすと云ふの意は、これによりて益々一般發展の行程を促進して、他の經濟形態 (ラムペンヒットはこれを gebundene Unternehmung と名けて freie Unternehmung と分つ K. Lamp-jüngsten deutschen Vergangenheit. Bd. II. S. 903. S. 466 ff. の發生を早からしむるが爲にして、單に企業其自身の存在を脅すと云ふが如きを云ふものに非ず。若し單に病的現象たるに止まらば、何ぞ他を浸染し影響すること如此深く且博きを得ん。何ぞ況んや恐慌なる『ミリュール』あるの理あらんや。而も個々の恐慌は其自らに於て其眞意義を發揮し盡すものにあらず。個々

の恐慌のみにては決して至大至重なる問題たることなし。唯其が價值革命の「行程」を示すものなるが故に深く考究を要するなり。恐慌は單に『企業不成功、違算』等の如き淺薄なる説明を以て盡すを得ず。其最大最重の意義は經濟上に於けるよりも、倫理上に於て求む可き所以に在り。恐慌の發生は冒險投機又は生産過超の如き單純なる原因に基くにあらず。近世の企業生活が極度迄發達せる鋭敏感受性『フライング・エム・ブー・ドング』を有するが爲めなり。ラムブレイトが企業時代の特徴を以て興奮性（『ライツ・カム・カイト』又之れを『ネルヴォシテート』と名けたり）となす所以に在り（前掲二頁）。此の『ライツ・カム・カイト』何にが故に生ぜるか。ゾムバルトは企業生活の姿調は『Tempeschleunigung des Kapitalumschlages』と云ふことなり。Sonbat, Der moderne Kapitalismus. Bd. II, S. 73. は客觀性の擴張精神の體化にありとし之れを説明するに自我と物との間の距離を以てせり。Simmel, Philosophie des Geldes, S. 455, 475. 而して之に關連して甚興味あるは、企業は生産の経過を長くするものなりや短かくするものなりやに關するレキシスとボエム・バヴェルクとの論争なり。レキシスは謂らく、企業の發達は生産経過を著しく短縮すと。Schmoller's Jahrbuch. XIX, S. 332 ff.

ボエム・バヴェルク乃ち之に反對して曰く、資本制經濟の特徴は生産の経過を長からしむるにあり。E. Strittige Fragen der Kapitaltheorie, 1900, S. 8 ff. ゾムバルトは此間に介立し之が調停を試みて曰く、個々の生産物のみに就て云へばレキシスの言中れり、然れども全生産経過に就て論ずればボエム・バヴェルクの言理なきにあらず。蓋し資本は一日一刻も早く回收せられんとを要求す。即ち生産経過の短縮は其不可缺手段なり。然れども生産経過を短縮し得んには人間の労働を出來得る限り節約し機械の使用を以て之れに換へ、而して協業及び分業の利を極度迄收めざる可からず。均業分業の利をあげ、人間労働の効程を増進せしめんとするには、勢ひ放下資本『アンラーゲカピタル』を多く用ゐざる可からず。即ち此等固定資本たる機械其他の生産要具は益々複雑に、益々緻密に、益々大仕掛なるを要す。今如此生産要具は其生産に長き時期を要するものなり。されば此等を包含せる全生産経過は、個々の生産経過短縮の目的を充分に達し得ん爲には、又益々長時間を要するに至ると。H. S. O. Bd. II, S. 71 ff. マルクス曰く、不變資本は可變資本より増殖速かなりと。I. S. 173 ff. 自我と物との距離は一方に於て益々接近し、他方に於て益々遠ざかると云ふも、亦此意に解

するときは趣味津津たり。然れども此は未だ以て近世生活の特徴を説き盡さざるものなり。予は乃ち此理を尋ね求めて苦思するもの既に久し。僅かに契機と韻律との交渉に思ひ到て稍々意に當るものありと雖も、未だ以て最終の到達と信するものにあらず。以下之れを述べて學者の教を待ち、以て企業倫理に關する予が研究の題目を明かにせん。

二 自我と對象の主従關係竝に距離

意識の對象は外界と他の内界と是れなり。外界と他の内界とが融合し、意識に對して殆ど一體をなすことあり。意識が他の内界と融合して外界に對して殆ど一體をなすことあり。ブライジツヒ曰く、自我は常に同一なり、然るに『世界』は兩様の態に於て顯はる。行動し意志する活動の生活の範圍に於ては『人類』なり、他人なり、基督の云ふ『隣人』にして、ニーチエの謂ふ『遠人』なり、自我は之れと對峙して關係を立つるを要す是れなり。然れども自我の觀察は更らに一歩を進めて、自然なると人類なるとを問はず之れを綜括して對象とし、之れに對して關係を立つるを求む是二なりと。

Ich und Welt in
der Geschichte.

Schmolter's Jahrbuch
1902. S. 1363-4

而して如此自我が其對象の變動に關することなく常に同一なるが爲め、自我の其對象（即ちブライジツヒの所謂『世界』）に對する關係は唯一あるのみ。制御か服従か是なり。制御の關係に立つ自我は人格の發動 Persönlichkeitsdrang と云ひ、服従の關係にある時は之れを團集の衝動 Gemeinschaftstrieb と名く。ブライジツヒは之れを以て凡ての史的發展の根本動機なりとなし、其一去一來が即ち歴史上の消長榮枯變遷を喚起するものなりと云ふ。其大著『近世文化史』は即ち此の根本思想を西歐の歴史に付て説明するの目的に出づ。然れども予を以つて之れを觀るに、如此は意識と對象との關係の一半を論ずるものに過ぎず、其他の一半を閑却するが爲め、其論する一半に就ても亦極めて皮相の説明に止まるの結果を生ぜずんばあらず。何故ぞや。ブライジツヒの所謂世界とは、外界と他の内界とが常に融合せられて、一體の對象として自我に對するのみ云ふものにして、意識と他の内界とが一體に融合せられて外界に對するの關係は毫も相與る所なければなり。試みに思へ、人格の發動團集の衝動の二が凡ての史的經過の最終窮極の根本動機たるならば、其が一進一退は唯相互の動と反動との作用のみに出づる

ものなること、波濤の一去一來に等しきものなりや、將た亦此の二の根本動機の更に根本原因たるものなきや否や。ブライジツヒの説明は此の疑問に對して到底維持するを得ざることを、彼自ら之れを認めざるにあらず。曰く「此くして凡ての社會史の根本的對抗の動力も亦相參差する所あり。……此兩動力が種類の差よりも寧ろ度合の差なりと云ふことは、予が主張の缺點とす可きにあらず……凡ての對抗は竟に一體に歸することはヘラクリトス既に之を道破せりと。P. a. O. SS. 130-71. 既に此兩個の根本動機にして相合して一に歸するものなるを知らば、即ち其歸する所の一體とは何ぞやの問題を説くは、單に概念上の要求たるに止まらざらん。他の言を以て云へば根本動機の更に根本原因たるものなかる可からず。是れ即ち人格發展の要求に外ならず。人格發展の要求はブライジツヒの思ふが如く、或は進み或は退き、或は來り或は去るが如きのみにあらず、常に一定の向上の道程を示すものなり。既に云へるが如く、波濤の一去一來は、更に、より大なる觀點より之れを見れば、自然發展の一定の歸趣に向て相共に善きものなる以上は、人格發動と團集衝動とは、又共に等しく一定の歸趣に對して相共に善きものたるを知るに難からず。

予が名けて經濟組織の擴張的發展は他方に於て、又た同時に經濟單位の縮小的發展を意味すと云ふもの即ち是れなり。ブライジツヒは原始の人類が主として團集の衝動によりて支配せられ文化の發展は人格の發動を喚起すること益々切實となり、最近時に至りては、更に再び團集の衝動が人格の發動に勝る重要を有するに至れりと論じ、此矛盾を調和せんとして左の如く言へり。

他の多くのものが一人の制御意志に服従するは、此の人格發動の能く行はれ得ん爲めの前提條件なり、人格發動の強く支配する時代は亦必ずや之れに相應して、他方に服従者の多數の團集衝動の愈々盛なるものあるを見る P. a. O. S. 1365.

然れども人格の發動が切實を極むるに従ひ、其目的を達するの手段として、團集の衝動を容れざる可からず。多數の服従は少數の極盛なる人格發動の必然的前提にして、之れありてこそ、實は人格發動の眞の要求が最も能く充たさると云ふは到底牽強附會の説たるを免れず。何となれば、他方に於て、其反面として團集の衝動が、より善く充されんが爲めには、又人格發動を前提すと云ふことを拒否すること能はざる可ければなり。然らば則

ち此兩個の根本動機なるものを得ての後、吾人の史的經過に對する知識は寸毫の増加を見ざるなり。蓋し最近時に於て團集の衝動の優勢を占むるに至れりと云ふは人類原始の生活に於ける團集の衝動とは其意全く異れり。經濟單位の發展は益々縮小的なるべくして圓滿完美に發達せる人格ありて後にあらざれば、近世の最も進歩せる團集結合は到底之れを望む可からざるの理は、予之れを説明し得たりと信ず。『經濟單位發展史上韓國の地位』本全集七頁以下参照 知るべしブライジツヒが所謂『ゲーゲンザツ』なるものは其實對抗するものにあらず、同一發展行程の前後に關する觀察の異同に外ならざることを。人格が最も完全に發現し得んには、必ずや又團集結合の最も進歩したるものあることを要し、最も進歩したる意味に於ける團集は、又必ずや最も進歩したる人格の伸張を前提とす。ブライジツヒの所謂『ゲーゲンザツ』は之れを時の上に於る前後『ナツハ・イン・アング』と見るよりも、寧ろ距離の上に於ける左右『ネーベン・イン・アング』と見るを要するの理茲に於てか明ならん。距離の上に於る『ネーベン・イン・アング』は、即ち自我と世界との關係と云ふよりも、寧ろ凡ての内界の外界に對する關係上に就て現はるゝを云ふなり。外界と對峙する意識と他の内界との融合が密接ならざるときは、ブライジツヒの所謂團集の衝動たる可く、其融合が密接なるときは即ち人格の伸張たる可し。換言すれば、内界と外界との距離が他の内界との距離より遠き時は、團集の衝動此に働き、其近き時は人格の伸張活動す。而して、外界との距離全く之れなきに至れば、人格の發動は最も強く働かざるを得ず。近世の生活は科學技術の力により外界に接近すること最も多きが故に、人格發動亦最も強く働くと云ふを得ると同時に、ジムメルが精緻の説明を試みたるが如く *Simmel, Philosophie des Geldes, S. 512 ff.* 認識の上に於ては外界を知らざる以前、何等距離の觀念あるとを得ず、近世の科學技術の力により認識に於て外界に接近すること愈々繁きに從ひ、認識が愈々新たに從來知られざりし外界を見出し、之れに對して關係を定むるが故に、此意味に於ては、文化の發達は、認識の上に於ける外界との距離を益々遠ざからしむと云ふは、即ち人格伸張の最も進歩せる現時は、他方に於て團集衝動の亦強き時たるの理を道ひ得て甚だ微妙なるを覺ゆ然れども如此は未だ以て其の蘊奥を盡すに足らず。自我と物との距離は、一方に於て益々接近し、他方に於て益々遠ざかるとの意は

更に深き説明を要す。何となれば此に所謂物とは自我に對する對象の凡てを云ふものにして、自我の之れに對するや、其外界なると内界なるとによりて大に軒輊する所あるを顧みざるものなればなり。自我が外界に對する距離愈々遠ざかると云ふの意と、他の内界を對象として之れに對する距離が愈々遠ざかると云ふとは其意甚だ異れり。ブライジツヒの所謂制御と服従との二個の關係は、此の間の理を稍々明かにするを得るものなり。何となれば距離の遠近に距離の制御的遠近と服従的遠近とあればなり。服従するに於て接近するも制御するに於て遠ざかることあり。制御距離に於て接近するも服従距離に於て遠ざかることあり。而して制御服従の二に於ける距離の遠近は、其の外界に對すると、他の内界に對するによりて大に趣を異にせざる能はず。原始の生活に於ては、自我は服従的關係に於ては自然と最も短き距離を有し、制御的關係に於ては最も長き距離を有す。他方に於て他の内界に對しては、服従的關係に於て最も遠き距離に在り、制御的關係に於て最も近き距離に在り。是れ團集衝動の最も強く働く所以なり。蓋し此の時代に於ける團集の衝動とは、強力なる中央の權力 Eines der häufigsten Bilder, unter denen man sich die Organisation der Lebens-

Inhalte deutlich zu machen pflegt, ist ihre Anordnung zu einem Kreis in dessen Zentrum das eigentliche Ich steht. a. a. O. S. 508. を前提として成るものにあらず。

相共に率ゐて相共に服従せんとすることが、原始時代の共產共有の社會を生じたるものにして、他の語を以て云へば、此團集を形成する自我は皆制御せられんとして相接し、制御せんとしては相反撥するものなればなり。相共に率ゐて服従すと云ふは、自我の中他を制御せんとするもの一も之なきことを意味す。經濟單位の尠大にして經濟組織の狹少なる所以茲に在り。其制御せられんが爲めの團集は、服従の關係に於て各最も近き距離を有する自我の集合なり、制御的關係に於ては、各最も遠き距離を有する自我の集合なり。若し夫れ其自身の中に何等の制御的中心あることなくして結合せる團集は、必ずや外界の制御に全然服従せざること能はず、外界の制御に全然服従する此團集は、内に對しては全然均一ならざる可からず。何となれば、團集間の各自自我の關係は、其が相共に自然に對して有する同等均一の距離によりて定めらるゝものなればなり。對象たる外界に對して全然同等にして均一なる關係を有する各自自我は、此關係に於て又各同等均一ならざる可からず。而して外界と相對するの關係が、如此原始時代に於ける人類生活の内容

の大部分を占むるものなる以上は、其の生活の全體が又同等均一なる可きは理の暗易き所なり。知るべし、如此時代に於ける各自我の間には、何等の分岐の存する能はざること。是れ即ち原始の團集は外に對すると同じく、内に對しても亦均一同等なりと云ふ所以なり。故に予は之れを分岐以前の同等均一と名けて、遙に後世の分岐の甚だ發達せる文化生活の團集との間に儼然たる區別を施さんと欲す。蓋し近世の團集は各自我間の關係最も分岐し、最も複雑を極め、多様多趣なる自我（經濟單位）ありてこそ始めて成立するものにして、其外界に對する關係に於ては服從的の距離最も遠く、制御的の距離最も近く（ジムメル S. 313. は之れを Ueberwindung der Distanz と名け、ジムバルト II. S. 83. は之れを Ueberwindung der Materie と名づく）、從て或る意味に於ては自然との交渉殆んど考慮に入らず考慮に入るものは獨り複雑にして、分岐せる各自我間の關係たるのみに至ればなり。此の各自我間の關係益々分岐し、益々複雑を極め、殆んど端倪捕捉す可からざるに至るや、茲に『價值現象の革命』を生ず。分岐以前の團集にありては、各自我の間には同等均一の關係あるのみなるが故に、『人が人に對して如何なる價值を有するや』の問

題は全く存在せず。何となれば此團集内にありては、他の自我は殆んど意識の對象たらず、從て價值の對象たらざればなり。ブライジツヒが自我と世界との二つのみを對立せしむ可しとの主張を容るゝとせば、此場合に於ては『世界』とは獨り外界あるのみにして、自我は團集の凡てを包含し、自我の對象たる世界の中には内界は全く存せずと言はざる可からず。衆多複雑多様多趣は又其對象たる外界との關係に於ても存せざることは言ふを須ひず。故に價值現象の動搖あり得るの理全く之れなし。而して其同等均一の關係は外界なる對象に對するときに於てのみ意味ありて、自我と自我との間の關係は、一に全く其外界との關係によりて定めらるゝものなること、亦之れを繰返す要なからん。然らば此外界に對するに於て意味あり、從て他の内界に對する關係をも全然支配する所の關係、換言すれば、此時代に於ける人類生活の凡てを支配する關係は何ぞや。答へて曰く、韵律 Rhythmus 即ち是れなり。

反之自我と自我とが大に分岐し、其間の關係が複雑衆多、多様多趣なるに至れる近世文化生活に於ては、人生の内容の最大部分は、自我が外界に對するものにあらずして、今や各

分岐し獨立し對峙するに至れる自我と自我との間の關係是れなり。換言すれば、他の自我を對象化し（ジムメルは *Vergegenständlichung des Geistes* a. a. O. と云ふ）、之れに對しても最も重要にして複雑なる關係を生じ、他方に於ては外界との關係は之れを資本化するによりて、又悉く他の人格との交渉を経るを要するものたるに至り、外界其の物を直ちに對象とするの關係は殆ど意義を有せざるに至りて、人生生活の内容は悉く自我と自我人と人との關係に盡き了らんとす。然らば今此關係を支配するものは何ぞや。曰く、契機 *Conjunctur* 即ち是れなり。

韵律と契機の二は分岐以前の生活と、分岐以後の生活との間に於る根本的差異の特徴たるものにして、人格對外界の關係の變遷は此二個の根本の特性に逢着して始めて正當なる解決を得、價值革命の眞意義亦之れを得て始めて了解することを得るなり。貸借的世界觀が近時倫理の根柢を形成する所以、此を措て他に求む可きなし。

右一文は三十八年八月「内外論叢」第四卷第四號掲載のものにして、當時予は更に章を重ねて綴筆する心組なりしも、「内外論叢」廢刊の爲め、又た身邊の事情の爲め、終に果

さずして已めり。此篇實に予がマルクス研究に於ける第一文にして、湘南小田原なる左右田君の別墅に閑居するもの數月、出て御幸濱の逍遙に胸中の鬱を遣り、入りては池邊の小亭に屹々としてマルクス資本論を耽讀したりし時の作なり。恰も學弟車谷商學士小田原に來遊中なりしかば、予は思路の發展し行くに任せて先づ之を口述し、學士は紙を伸べて之を筆記し、斯くすること前後數回にして漸く脱稿を見たりと雖も、予が心猶未だ安ぜず、常に此文の要旨心頭に往來しつゝあり。今にして回顧すれば多少の感慨なくんばあらず。爾來身邊の事情種々に變遷したれども、當時志したるマルクス研究の事は僅作らも之を繼續し、此第一篇の諸文と「續經濟學講義」（本全集第一集收録）とを起稿したり。而して本文の論旨は大體に於て渝らず、更らに少しく之を布演したるのみ。殊に韵律と契機の語は今之を固執せずと雖も、當時予の言はんと欲せし所のものは「續經濟學講義」に於て、循環の生活と流通の生活として之を開陳し置けり。幸に對照を乞ふ。但し八年間の構想何等の進境を見ざるは深く愧づる所なり。

七 ゾムバルトよりマルクスへ

参考

- 關 博士 經營と企業の意義に就て 國民經濟雜誌九の四號
 同 再び經營と企業の意義に就て 同誌十の二號
 上田教授 企業及經營の意義に關する疑問 同誌九の五號
 坂西教授 企業と經營 同誌十の一號

企業と經營の意義に就て、關、上田、坂西三教授は各其得意の方面より極めて有益なる研究を發表せられ、同時に予が舊著中に述べたる思想に就ても詳細なる批評を下されたり。予は爲に自家年來の蒙を啓きたること尠からず、切に感謝の意を表せざる能はざる所なり。

り。關博士の研究は頗る綿密にして、ゾムバルトの『近世資本主義論』に對し根本的に批評を施され、予が豫てより疑惑を懷く點に就て新しき考を述べられたる多し。上田教授は大體に於てゾムバルトに賛成せられたるも、所謂『欲望充足經濟』此譯語不可なり「要領充當經濟」と改めんと欲すと『營利經濟』とに就ては別個の考を立てられ、ゾムバルトを改修すべしと論ぜられたるは、予もまた多少思慮しつゝありたる處にして、益を享くること大なり。坂西教授は此點に就て關、上田兩教授の誤解を匡しつゝ、更らに經濟經濟行爲に就て新説を樹てられ、經營の意義に就て一段の擴張を加へられたり。關博士の議論に就ては、内容の上よりは予は賛同し難き點あるを覺ゆるも、ゾムバルト説に對し批評的態度を取る可しとするに於ては全く同意同感なり。從て上田教授の改修の議に付ては、ゾムバルト解釋論としては、坂西教授と共に、上田教授にも將た亦た關博士にも誤解あるべしと認むるものなるも、其議論の趣意に至ては上田教授と同意同感なり。坂西教授の研究に向つては、其積極的部分に於て遽かに賛成を表し難しと思ふも、消極的部分に於ては全く同意同感なり。今其等の理由を開陳するに付て、予は新たにゾムバルトに往きて見るの必要ある

を感ずるものなり。此くするによりて予が往時の舊説に對する諸君の批評にも答へ、兼てまた其後多少商量を着けたる思想を披瀝することを得可きか。請ふ試論を許されよ。

二

三教授今回研究の問題に充てられたるものは、企業及び經營の兩者なれど、企業に就ては三教授とも一樣にゾムバルトに賛同せられ、其説に對し敢て異議を挾まれず。之に反し經營の意義に就ては、關博士は之を『生産の組織』と解すべしとの新説を立てられ、坂西教授は消費の經營も亦た之ありとして『統一的に組織せられたる獲得又は充用行爲なり』との説を發せられ、上田教授は『財の獲得の爲にする技術上の組織』てふ舊説にて事足れりとし、而して是は畢竟ゾムバルトの『經營は勞働團體なり』と云ふと同一事なりと論ぜられたり。乍去、ゾムバルトの經營の定義即ち *Veranstaltung zum Zwecke fortgesetzter Werkverrichtung* 『繼續的作業の目的の爲めの施設』と云ふとに對しては、三教授とも別段の批評を下されざるなり。されば關博士は企業の意義に付ては全くゾムバル

トの解釋に與みし、而して經營の意義に付てはゾムバルト説を主題とはせずして却て淺薄なる予が舊説を對象として評論を詳かにせられたるなり。換言すれば、關博士の批評は其の研究の主眼たる企業と經營とに付てはゾムバルト之に與るとなく、却て經濟要額充當主義等の附隨問題に付て其正面に立てり。此點に於ては坂西教授は予の舊説なるものに頓着なく、藝直にゾムバルトに肉薄して經營の意義を索められたるは、博士とは大に立場を異にするものと云ふ可し。予の見る所にては、混雜は先づ此點より起り來るものゝ如し。『技術上の組織なり』てふ説が破れたりとして、其は同時に『繼續的作業の目的の爲の施設なり』てふ説をも勘破了せりと云ふとはならず。博士は其新説なる『生産の組織なり』てふ定義を打ち立つる以前に、先づ『繼續的云々』てふゾムバルト説の本壘を破壊せざる可からざりしなり。之と事異りて、上田教授は予の舊説なるものも、ゾムバルト説も一齊に之を是認せらるゝものなれば『繼續的云々』なる定義も同時に受入れらるゝものと見て差支なかる可く、從て教授の論説は終始理路一貫したるも、關博士のは聊か岐路に踏入りたるやの觀ありと思はる。乍去『經營は技術上の組織なり』と

のみ言ふ言葉の中に、直ちに『繼續的云々』なる意味が含まれ居る可しとは説者なる予自らさへ考へ居らざるなり。上田教授は大體に就て着想し成る可く好意的解釋を下さんする態度を取られたるは説者の感謝に堪へざる所なれども、此場合に於ての上田教授の解釋は、餘りに廣義に涉り過ぎたるものと考へざるを得ざるなり。蓋し『技術上の組織を經營、經濟上の組織を企業と呼ぶ』云々の原論の定義を下せる時の予は、ゾムバルト説の『繼續的云々』を少しも胸中に宿し居らず、彼處に斷り置ける如く、フックス小讀本に倣ひ、獨逸學者現今の通説を書寫したるに過ぎざる也。之に反し、企業心理論の時の予は、企業の意義をゾムバルトに就て譯出したり。故に關博士詰問の如く、兩者の間には些の交渉なきは言ふまでもなし。而して企業心理論に於ては少しも經營の意義に論及しあらず、經營と對照して企業の意義に付ても亦た考慮の跡を止めあらず。斯く懸離れたる兩個の場合を打て一丸と成すことは説者自ら敢てし難き所なり。之を要するに『經營は技術上の組織、企業は經濟上の組織』てふ説の評論は、全然ゾムバルト以外に立つてせざる可からず、反之、企業經營に付てゾムバルト説を評論せんには、『經營は労働團體な

り』又た『經營は繼續的作業の目的の爲めの施設なり』てふ彼の經營論を拉し來つてこれを其企業論と對照してこそ、始めて理路は井然たる可きなり。坂西教授の明瞭なるゾムバルト解釋の中此一段は漏れたり。

三

さて斯く考へ定め置きて、予は直ちに關博士質問の一箇條に豫め答へ置くを便なりと見る。博士は予が原論中の企業の定義にては、企業中に手工業を含むことゝなり、企業心理論中の定義にては含まざることゝなる可し、これ矛盾にあらずやと云はれたり。然り、確かに矛盾なり。何故予は矛盾したる兩説を陳列して平然たるか、其答は極めて單純なり。原論にては獨逸學者多數の通説に従ひ、一般に企業の定義を下し、企業心理論に於ては、ゾムバルト限り通用の近世資本主義的企業のみを企業と單稱して定義を下したるものなり。或は誤解豫防の爲に、企業心理論の企業に『近世資本主義的』てふ形容詞を冠らせ置く可かりしか（ゾムバルトの原文には資本的てふ形容詞冠らせあり）。予は前後

の關係に於て此くする必要なしと考へたり。されば原論の企業の中には企業心理論の企業は勿論其以外のものも含むは説者の辯明を須たす。而して此の廣き意に於ける企業を經營と對立せしめ、斯くて『技術上』『經濟上』云々の説が發動したるなり。故に今回三教授の企業經營區別論とは全く立場を異にするなり。

四

さて經營企業異同論に歩を進むるに先ち、企業なる語の意義を一般概念として（經營と對照するに付て）、斯く極めて狭き意のみに限局することの可否を研究せざる可からず。三教授は一樣に此點に付ては議論無用と認められしが如し。予は必ずしも然らざる可しと信ずるものなり。

ゾムバルトは故意に企業の意義を斯く狭きものに限るは、自ら充分熟考の結果なりと云ひ、こは決して普通の解釋にあらざるは言ふまでもなき所なりと明白に告白し居るなり。其言次の如し。

『企業なる語を此く單に營利經濟でふ經濟形態の意味に限りて使用するは充分熟考の上のことなり。予は斯くするによりて既に名稱の上に於て、此の經濟形態の特色を正しく言表はさんと期するものなり。但し此く狭き意に企業なる語を限定するは、普通の慣例にあらざること人皆之を知らん。』【近世資本主義論 第一卷六十九頁】

即ちゾムバルトの企業の意義は、ゾムバルトかぎり通用のものにして一つの作爲概念 Kunstbegriff なるなり。關博士引用のハルムスの言を藉りて云へば、一の精神體操博士の譯、思想の訓練なり。博士は經濟の分類等に就ては、稍々感をハルムスと同ふせらるゝ如きも、企業の意義に付ては此く精神體操の演習せられ居るには論及せられず。予を以て見るに、彼の經濟分類説の如きは緒論中に出現するのみにて、二卷無慮千二百頁の大體より見れば、左まで重大の關係ありと覺えず。たとへ無理至極なる概念の遊戲 Begriffsspielerei ありたりとて、忍耐の出來得ざる程の事にもあるまじ。之に反し『近世資本主義論』の全部に

渉りて（或は其約束されたる續卷に於ても）、一切の研究の中心たる企業其ものに付て、劈頭先づ此重荷を課するに付ては充分なる研究を必要とするものゝ如し。而して此回

の論戰の如き場合に於ては、此事重大要件たる可しと信するなり。坂西教授は經濟經濟行爲と云ふ如き重大事に就て詳しく考を下されたれども、企業の語其ものに付て、獨逸學者の通説を一切排斥して、ゾムバルト獨得の狹義説を採用するに付ては、雙語をも着けず。教授は這般の事を *terra cognita* に屬するものとせらるゝが如し、非か。

企業なる最重の概念が此く作爲せらるゝ以上は、他の概念も同一筆法を以て作爲せらる可く、否せられざる可からざる可なり。斯くて經營企業異同論は、畢竟作爲概念の研究に歸着し、上田教授が其論文の末段に試みられたる如き實際論との調和は餘程困難なる事となる可きなり。此邊坂西教授の終始ゾムバルト一貫の議論は、坦々たる大道を行くものとす可きに似たり。其反對に關博士の如くゾムバルト否認の立場を取りつゝ、企業の意義考定に付ては全くゾムバルトに寄附して、其作爲概念を採用し、之と相對せしむるに種々實際的考察の上に打立てたる經營の概念を以てするは、造花師の梅と素艸師の櫻とを植物學的比較研究の材料とするが如き觀なきを得ず。

五

議論無用説を執らざる予は、第一ゾムバルトの『近世資本主義論』其ものゝ上に於て、斯く企業概念を狭く限局したることが當を得たりしや否や。第二抑も經濟學上の概念として一切の場合に、此の狹義企業のみを企業とすることが正しきや否やの、二個の問題の存在を否定し得ざるなり。

ゾムバルトが企業を近世資本主義的のものに限りたる結果は（予は結果と云ふ可しと思ふ、其理由は追々明瞭となる可きなり）、手工業の取扱に付て甚だ大なる困難を生じたるが如し。即ち關博士明解の如く、獨逸學者間に於て普く經營の一形態と認められ居る手工業が經營形態の圈外に驅逐せられて經濟形態と成り了せることはなり。從てゾムバルトの所謂手工業は商業までをも含むことゝなりたり *Handwerk als Wirtschaft* 並に *Handel als Handwerk* と云ふ是なり。斯くて彼の言ふ手工業は歷史上又た今日實際上の手工業とは大に異なるものとなりたり。換言すれば、企業に付て作爲的概念を造立したる

ゾムバルトは、また手工業に就ても作爲的概念を拈出し來つて、兩者は共に大地を離れて空中に浮揚するものとなれり。而して此の浮揚體操は限りもなく進行して、經營に付て甚だ異様な分類法を産み出すことゝなれり。即ちゾムバルトは經營の八種を舉げて、

一 單獨經營 二 家族經營 三 助手經營 四 擴張せられたる助手經營 五 小なる社會的經營 六 大なる個人經營 七『マニユファクチュア』八 工場となすものなるが、一より六までは抽象的分類にして、七と八に至り、俄かに具象的分類となることは輕々に許容するを得可きか。假りに國家形態を分類して

一 專制國家 二 立憲國家 三 共和國家 四 北米合衆國 五 獨逸帝國となしたりとせば如何。蓋しゾムバルトは手工業丈けは其絶倫の精力を以て兎に角、企業にもあらず、經營形態にもあらずとなし得たれども、『マニユファクチュア』と工場とに就ては、其取扱に困難を感じ、矢張獨逸學者の通説に従て、これを經營の形態となしたる結果、此く木に接ぐに竹を以てすることゝなりしにはあらずるか。

次に經濟形態なる概念も亦た同様の消息を傳ふるものと見るを得可し。狹義の企業

を差引きたる殘餘の企業を如何んか處置する必要あり。依りて茲に經濟形態なる新語が作爲せられたり。ゾムバルトの言を聽けば曰く、

『普通には（企業なる語を廣く用ゐて）手工業企業とも云ひ資本的企業とも云ふなり。シユモラーは云々。故に予はシユモラーの語の『企業』に換ゆるに、一般的なる『經濟形態』てふ語を以てし、企業は幾多の經濟形態中以上に略言し、以下に詳論す可き特色を具へたる特殊のものなるを明かにせんと勉めたるなり。』
六十九頁

關博士が『經濟とは時代を溯るに従ひ、欲望充足の目的を達するに必要な秩序組織と解し得可きも、此組織中に包含せられたる生産の方面と消費の方面とが分化するに従ひ、單に生産の目的を有する組織を經濟となすが如し、『オイコス』經濟も手工業も資本制企業も同一列の經濟形態として列擧せるは、上述の觀念の錯雜に依るものにあらずるか』と非難せられたるは、這裡の消息を傳ふるものなり。手工業を企業圈外に放逐し置きて、經濟形態なる漠然たる文字を設け、手工業も『エコス』經濟も皆此經濟形態なりとし、而して文字を節約して經濟形態を單に經濟となしたる爲め、此觀念の錯雜を惹起したり。

蓋しゾムバルトは博士の指摘せられたる如く經濟なる語に何の定義を下さず、下さるは能はざればなり。何となれば、彼は經濟なる *Mäcchen für alles* を左右に侍らせ置き經濟階段の意にも經濟主義の意にも、經濟制度の意にも又た經濟形態の意にも臨機應變使役したるなり。『要額充當營利經濟』の場合の經濟は經濟主義のことなり。彼は六十二頁の註に、こは經濟制度の略なりと明言したれども、こは兩を道れて軒滴に漏るゝものは乾くを得ざるなり。關博士非難の場合の經濟は經濟形態の略なること云ふまでもなし。之を直ちに取つてゾムバルトの經濟と、予が原論の經濟と角逐せしむるは博士の無理なり。ゾムバルトに向ても、予に向ても。

右の場合の經濟は、取も直さずシユモラーの意にての企業（又は企業形態）のことなるは、前に引きたるゾムバルト自らの言にて明なり。斯く洵け分れば、關博士質問の第二條 同博士の論 文四十三頁は最早辯明し了りたる譯なり。原論中に予が何の批評を試みざりしこと恐縮の外なし。今日此永借を償ふを得たるは博士の賜なり。

經濟なる語の用法は斯く區々なり。坂西教授の延長研究を以てしても、此の凡てを打

盡することは困難なりしが如し。但し其は後の考に譲る。然るに茲に譲るを得ざること一條あり。ゾムバルトの經濟形態も亦た甚だ漠然たることはなり。彼は其整然たる分類表に經濟階段經濟制度經濟主義の一切を網羅し盡せるも、經濟形態は之を表外に置きたり。他の語に就ては的確に意義を定めつゝ、經濟形態に付ては之を爲さざるなり。

之に反して經營形態に就ては甚だ詳細の説明を着けたり。否々經營の分類表の内容は經營形態の列舉にして經濟の分類表は經濟制度の列舉なり。經營には經營制度の列舉はなきなり。然るに兩表とも個人中間社會の三大別の下に分割せられ居るなり。是れ果して奇異の感なきを得るや。否彼は更に言へり。

『（經濟の）分類は迅速に皮相的に大要を示めずのみなり。現象の内的本質に就ては言ふ所尠じ。此點に於ては經濟及其形態の論は全く反對にして、こは嚴格なる分類に全然網羅し盡すを得るなり。』頁七十

經濟に就ては之を分類に容るゝを得ず已むなく『制度』なる代人を以て内容を充し、本人は別席に於て接待する所以は其應對に同一筆法を以てするを得ざりしによれり。何

となれば経済形態の本體は茫漠として捕捉し難かりし爲なり。是れ経済形態は作爲的企業に對する他の作爲物なるが爲にあらずや。而も此作爲物たる経済形態は其本質を明確ならしめんとせば、一切の作爲を覆すことゝなる、是れ主客たる企業の爲めに甚危険なり。故に之を莫々たる白雲の中に浮揚せる大傘として『エコス経済』までをも雜然掩蓋せしむるを便としたるなり。知らず三教授予が此説に贊せらるゝや否や。

さればこそ企業Ⅱ経済形態Ⅱ経済即ち企業Ⅱ經濟、手工業Ⅱ經濟となるなり。マルクスの套語を以てすれば是は『概念の魔術』、Feischismus der Begriffeなり。知らず、坂西教授が生擒したるは其正體なりしや否や。

六

營利主義と要額充當主義との混雜は、右より來る當然の結果なるが如し。蓋し近世資本的企業のみが企業にして、而して此企業は營利の組織、營利經濟のなりと説くが爲め、近世資本的企業以外のものは、一切營利組織以外のものとなるは必然なり。此等一切を雜

然と網羅する爲めに要額充當の経済形態即ち略して要額充當經濟てふ大傘を作れり。

換言すれば、ゾムバルトの所謂營利の主義と云ふは近世資本主義のことなり。然し是はゾムバルトの狹義的企業のみが企業たるが爲のみ。學者間一般の通説としては認められ居るものにあらざるなり。されば、上田教授が『手工業は營利主義的なれども資本主義的にあらず、企業とは營利主義的にして資本主義的なるものを云ふにあらざるか』と論ぜられたるは、這裡に入て商量したるものと云ふ可し。即ち關博士とは殆んど同様のことを云ふものゝ如くにして、實は一段を透過せるものと見る可し。關博士第二の論文に「營利に就ての」説は至實なり。

企業は家計より獨立せる組織なりと云ふが、上田教授説の關博士説と異なる特色なると、坂西教授既に之を明かにせり。予は更に上田説の特色として、右の第二條を附加する必要ある可しと信ず。要額充當と自足とを混同視せりとの坂西教授の非難は、關上田兩教授の甘受せざるを得ざる所なれども、第二の論文に於ける關博士の辯解は餘り有力ならず誤解は上田教授の場合に於ては深き而して正しき根柢を有したるものゝ如し。言換ふれば、上田教授はゾムバルトの石を虎と見て確的な一矢を之に立てたり。

クルツプ、ブーム、ストロングに就ての混戦は是より出でたり。而も予の見る所にては、三教授の齊しく黙認する點に於て第二の戦因は存するものゝ如し。即ち量と質との有限無限論是なり。關博士の「努力」は無論誤讀なり、「工業政策」附録の改譯は更に拙り、何故量と質との有限無限が企業の意義を定め又營利の意義を定むるに肝要なりや。ゾムバルトはアリストテレースを援て自ら助けたり。彼は此一點に餘程の重きを置くものなること、第一篇以下隨處に繰返したる彼の言に徴して疑を容る可からず。決して單に形容の一句と看道す可からざるなり。乍去ゾムバルトの眞意は之れを看取すること容易なり。彼の營利はアリストテレースの「クレマチステク」を言ふなり。アリストテレースの「自然なる經濟」「不自然なる經濟」の別は、一が量と質とに於て有限にして、一が量と質と共に無限なる事に基きて立てらるゝものなること、予嘗て之を論じたることあり。關博士が自己の欲望他人の欲望の區別を新設して此に換へんとするは、坂西教授評の如くゾムバルトを誤解したるに相違なく全く失敗の試とす可きが。乍去坂西教授が「營利は其自からの目的である、其逐ふ所の利潤と之を得んとする努力には限りのないものである」との訂正の企ても全くは根本の疑ひを打消す効能なきものと思はる。

何故に「其自からの目的」たるにあらざれば營利は營利たらざるか。詳しく云へば、先づ Geldverehr を經由すると云ふこと其れ丈にて、直に量及質の無制限と云ふことを伴ふものと斷言し得可きか。其然る可き由は説明を俟て後に始めて承服するを得可き所には非ざるか。

クルツプ、ブーム、ストロングは近世資本的企業なり、其が企業たるは資本的なればなりと。然れども資本的と云ふ事は未だ説明せられず。然るに資本的と云ふことを營利的と同義とし、兩者は營利的なり、企業なりと云へば、量と質との無制限と云ふことは當然伴はざる可からざることゝ考へ、茲に其無制限と云ふ意味を何とか處分せざる可からず。

然る場合には坂西教授の説明法が最上の處分法なる可く、又た元よりゾムバルトの眞意を傳へたるものに相違なし。さり乍ら、問題の取扱は解釋を以て終らず、解決を以て終る。關博士解決を求め、坂西教授解釋を與ふ、是亦企業狹義觀の招き致せる困難の一に算ふ可きにあらざるか。「經濟は價值付け團體なり、經營は勞働團體なり」と言ひて予は此區別

に大なる重要を繋ぐものなりと主張するゾムバルトが其經濟中の唯二即ち手工業と企業とのみを詳論するも他の經濟に論及する點しとの關博士の非難は此意味に於てゾムバルトの痛所に一打を加へたものならずんばあらず。ゾムバルトの此定義は誤解を防ぐ爲めには『經濟形態は價值付け團體形態なり經營形態は労働團體形態なり』と爲す可きものなるは既に絮説の要なきこと、信ず。斯くて彼は労働團體形態たる經營形態に付ては明晰に分類を加へつゝ、價值付け團體形態に就ては其多くの手工業を稍々詳しく、近世資本的企業の意に於ける企業を甚だ詳しく研究したるのみ他の價值付け團體形態即ち他の經濟形態に就ては殆ど名稱を列擧するに止めたり。是れ彼が元來の目的・價值付け團體労働團體の比較研究に存せず、近世資本主義研究のみに存するが爲めにして、別に怪む可き處はなし。然れども此を取て直ちに彼の企業經營比較論なりとするに至て混雜生じ困難起ることは甚だ當然と云ふ可きのみ。されば『經營は企業以前に存したり』云々と坂西教授が特に重きを置きて論ぜられたるは、別に此混雜を取除くことに力を藉さざりしものにあらずや。ゾムバルトの對立せしめたるは價值付け團體の一

切と労働團體の一切となり。彼が云ふ意味にての企業と經營とはあらず。從て『兩者は同一事の異なりたる觀察ではない』とて驚くに足らず。『經濟形態と經營形態とが同一事の異なりたる觀察ではない、經營形態が經濟形態以前に存した』か否かの研究のみが學問上の意味を成すなり。ゾムバルトの所謂企業と經營とは『相交錯する二個の圓の如きものなり』と云ふは、重りたる二枚の盆の一枚を片方に引寄せ置きて、さて此二枚の盆は重りたるものにあらずと云ふが如し。予は元より此説に賛成するものなり。元へ戻せば重なりたる盆なりと云ふには、坂西教授亦た異論なかる可し。

七

以上開陳する所により、少くともゾムバルトが企業の意義を限定したることは、多くの混雜と困難との原因となれるの一條は、讀者の首肯を購ひ得たることと思ふ。然れども混雜困難を醸すの一事を以て直に予が前に提出したる二個の問題は解答し得たりとす可きにあらず。予は更に觀察の方面を轉じて徐々に其解答に到達するの忍耐を讀者

に求めんとするなり。方面を轉ずるとは別儀にあらず。暫くゾムバルトを離れ抑も彼が説の依て起る所以を知らんとする是なり。管見にてはゾムバルトの『近世資本主義論』は大なる使命を帯びて作られしものなり。彼が思索論辯の一切は此使命より見てのみ解す可きものなり。予は管見の趣意を本論に着題せり。白くゾムバルトよりマルクスへ。

マルクスの唯物史観論は之を研究する學者多し。之に反して其經濟論の研究は僅かにボエムバヴェルクとゾムバルトとの二人者に止る事人の知る所の如し（ハマハー等を予が重視せざる理由は茲に略す）。而してゾムバルトの第一回の企『平均利潤率の謎の解答』は多數の學者に依て失敗の業と斷ぜらる。『近世資本主義論』は正さに第二の企として成れり。而かも彼が執る所の態度は第二回は第一回と全く趣を異にせり。第一回は擁護者の態度を取り、第二回は全く然らざるなり。今回三教授講究の主題たりし第一巻緒論の、凡ての議論を結ぶゾムバルトの言を聴け。

『讀者は、恐くは予の系統とマルクスの其れとの間の結縁を看取し得たるならん。然

れども予は望む、彼はまた予の考察法がマルクスに比して一步を進めたるものなるを認めたるならんを。彼は知らん、予はマルクスの形容的言語に換ゆるに非形容的言語を以てし、マルクスの現社會生活の發展行程に就ての非有機的革命的觀察を排して、近世の知識により多く相應する有機的進化的觀察を確立せんと企てたるものなるを』

七十
二頁

ゾムバルトの精神體操は彼がマルクスに學びたる所を人に課するものに外ならず。其分類も其概念も否其言辭も決してゾムバルト新發明のものにあらず。故に其一切に就ての正しき解釋は其源泉に溯つて始めて得らる可し。マルクスに往見せざるの前ゾムバルト説の批評研究は唯開始せらる可くして終結は之を望むこと難きに似たり。而して予は偶々今回の論戦がマルクス研究の機會を與ふる點に於て、三教授に深謝せずして措く能はざるを感ずるものなり。

右一文は國民經濟雜誌第十卷第三號へ第一章序論として掲載したるものにして予は更に數章を連載して、マルクス説の企業經營對立の根本觀念を細論せん積なりしも、後に

至り之を見合せ、更らに稍論旨を擴張して管見の概要を『續經濟學講義』（本全集第一集收録）中に陳述することゝしたり。されば本文を讀みたる讀者は直ちに轉じて、右書第一編の數章を看られんことを希望するものなり。

ハ 難解なるカール・マルクス

近世社會主義の學祖カール・マルクスの難解なるは知らざる人なし。此人を學祖と仰ぐ社會民主々義者は爲めに得することあり、損することあり。獨逸の學者某氏戯れに言へることあり、五十歳以下の人にしてマルクスを解したりと公言するものあらば、予は其人を名づけて『ハムバグ』と呼ぶに躊躇せずと。否『解したり』と言ふを要せん、『讀みたり』と揚言するものゝ多くは『ハムバグ』たるを免れざらんとす。英國の學者ボナーはマルサスを論ずる一節に曰く、

“When an author becomes an authority, he too often ceases to be read, and his doctrines, like current coin, are worn by use till they lose the clear image and superscription of the issuer.—Bonar, *Malthus and his work*. London 1885, p. 2.

學者一度有名なる人となる時は彼れは多く讀まるゝことなきに至る。而して其の學説は通貨の如くに、絶えず使用せらるゝによりて磨滅せられ、遂には發行者の肖像と表章とは見分け難きに至る

と。ボナー又た曰く

Adam Smith has left a book, which “every one praises and no-body reads,” Malthus a book which no one reads and all abuse. Do., p. 3.

アダム・スミスの残せる書は凡ての人之れを賞讃して、而して誰も讀む人なし。マルサスの残せる書は誰人も之れを讀まず、而して凡ての人之れを濫用す。マルクスはアダム・スミスとマルサスとを兼ね、彼を極度まで賞讃するものあり、彼れを極度まで曲解し濫用するものあり。而して稱揚するもの、譏貶するもの共に毫も彼れを讀まざるに至ては一。マルクスの難解なるは、多くは『讀まれざる』の難解にして、

『讀まれたる』マルクスの難解に非ず。然れども『讀まれたるマルクス』も亦た責なきを得ず。蓋しマルクスの著書は正しく彼れの學說を傳へたる所あり、正しく彼れを展べざるもの亦甚だ多くあり。而して徹頭徹尾一學究たるを脱せざりし彼れが所論は、時の推移と共に甚しく迂遠甚しく陳腐のものとなるを免れず。社會民主黨現時の最大學者の一人なるカウツキーはマルクスの『共產宣言』第七版 千九百六年出版に序して云ふ

Diese sechs Jahrzehnte konnten am kommunistischen Manifest nicht spurlos vorübergehen. Je richtiger seine Zeit erfasst und je mehr es ihr entsprechen hatte, um so mehr musste es in manchen Punkten veralten und insofern zu einem historischen Dokument werden, das Zeugnis für seine Zeit abgibt, aber nicht mehr bestimmend sein kann für die Gegenwart.

過去六十年（共產宣言出版以後を云ふ）は此の共產宣言に影響なくして過ぎ去る能はざりき。其が發布の當時を觀察し、之れに適合することの正しかりしに應じ、又た時の推移と共に陳古に歸することも多からざるを得ず、共產宣言は今や一の歴史的文書と看做す可きものにして、其當時の時勢を知るに屈強の史料たれども最早現今に於て吾人を指導す可きものと見る能はざるものなり

と（但し辨慶の勸進帳を獨逸語に譯出するものある時獨逸の檢事が其譯者を告發することなしと云ふの意にあらず）。是れ亦た同時にマルクスが一代の傑著たる『資本論』に就ても云ふを得可き所ならずや。社會民主黨の老儒ベルンシュタイン云ふ、『マルクスを反駁する最も有力なる敵手は、マルクス自身なり』と。

然り、マルクスの思想は複雑錯綜、相衝突し、相矛盾するもの多々、殊に其生前公刊したる『資本論』第一卷と其の死後エンゲルスの手によりて世に出でたる第二卷殊に第三卷とは、其所説相柄鑿するもの甚だ渺からず。『難解なるマルクス』は爲めに更らに一層難解を加へ、殆んど止る所を知らず。彼れの學說に對して全部の評論を試むるもの經濟學者中に未だ之れなきは、決して學者の怠慢に出づるにあらず。況んや其遺著の未だ現に續刊中に屬するものあるをや。マルクスを解したりと云ふもの、『ハムバグ』讀みたりと稱するもの、『ハムバグ』たるのみならず、マルクスの思想此外に出でず、マルクスの主義即ち斯くの如きのみと判定するもの、亦『ハムバグ』たらざるを得ざるを以て知るべきのみ、吾人の知り得可きは單に彼れが既刊著書に一貫して繰返して主張せられ

ある所のものゝみ。其主張亦た甚だ難解なりと雖も、大體の趨向に至ては讀まれたるマルクスの何なるやは、少くとも學者の見解凡そ一致するが、西洋諸國に於ける現狀なり。翻て我邦に於けるマルクス如何と問ふ。問題は爾かく單純ならず。讀まれたる難解のマルクスあり、讀まれざる難解のマルクスあり。而して是れが爲めに利するものあり、損するもの亦たあり。讀まれたるマルクスの難解の専門の學者にさへ崇たるものあり、其甚しきは學者が爲めに學名を損するが如き損の殊に甚しきもの。マルクスの讀まれたる可き其祖述者即ち世の所謂社會主義者亦た其難解の爲めに損する多きものの一。主義を取り、説を立つる各人の自由なり、唯だ自らマルキストを標榜する以上、マルクスの難解如何に甚しくとも、必ず之に打克つの忍耐と熱心とはなからざる可からざるや自明の理。マルクスの社會民主々義を究めて後、自ら意見の啓發し思想の發展して、更に進むたる立場に上る甚だ可。然らず、唯マルクスの一般普及のものたるが爲、而も未だ其難解に打克ち能はざるが爲め、忍耐と根氣とを缺くが爲め、新を求め奇を追ふて逸足して奔り去らんとする、斷じて事に忠道に信なる所以にあらず。而して是が爲めに却つて累を主

義其物に及ぼし甚しきに至てはマルクスを以て無政府主義の開山開祖なりきとの噴飯絶倒猶ほ且つ及ばざる盲説呆論の世に傳播して、教育あり文字あるべき筈なる階級の儕輩を徒らに世界の嗤笑の前に曝らすが如きことあらば、先人を傷ふの責如何にして辭するを得ん。正しく解せられたるマルクス若くは其主義の爲めに損を蒙むるは、或は『マーカー』に擬するを得ん。誤解せられ否曲解せられ否盲斷せられたるマルクスの主義の爲めに苦むは馬鹿々々しからずや。其爲めに費消する時間と金錢と『エネルギー』とあらば、マルクスの難解を釋き了り能はずとも、人を教へ世を導て其の攻撃の照準を正鵠に定めしむる位は十分出來得可し。天に唾する者は愚人なり、乍ら唾の落ち來る時誰人かの面を汚し、何人かの衣を損することなしと限らず。若かず其愚人に教へて唾は必ず唾壺の中に吐くこと警視廳令の如くせしむるには。

マルクスの難解なるが爲め利するも損するも、其多くは其祖述者の計算に於て起る。眞乎マルクスを當面に提け來らば、之れを防ぐこと覺束なかる可き我邦に於て、彼等は其難解なるが爲めに利するならん。然れども利を恃めば、損は辭す可からず。夜逃の成金

を學ぶはマルクスの後代とも思はれず。利も損も難解の盾の後に圖るは卑怯先づ其盾を撤し去れ。少くとも多少の文字ある可き筈なる俗人に、西洋人に聞かれて赤面せざるを得ざる如き愚論の種を取除き遣れ。而して後正面より進め、必ずしも先づ獨逸語を學んで頭を悩すと云はん。汎く分り易からんを主とせよ、否、少くともマルクスとアナルヒスムとの關係は岡ツ引と巾着切との其れの如くなりきと教へよ。

邇莫、マルクスは終に難解學者の悩む所、我れ人の泣く所、試みに『難解なるマルクス』一章を作る、自ら愚痴以上の價值ありと思はず。

右一文は明治四十年三月の執筆にかゝり、當時東京經濟雜誌第一三八に掲載したり。事は『共產宣言』の邦譯者某々氏等が翻譯の故を以て罪に問はれんとしたるに關連し、所謂社會主義の論客が、マルクスの學說を奉ずと主張して漸く無政府主義の説に變化しつつ行くが如き形勢あるを認め、彼を憤ると共に、此を戒めんと欲して此一文を草せり。其後の出來事は唯だ予の當時憂慮したるもの、豫期せざる程急激の變遷を來したることを明らかにしたり。予は今に至つて痛恨の念猶已む能はず。我等讀書子元より時務を知らず、然れども世上の先覺者が學問の研究を蔑視するも亦餘りに甚しからずや。而し

て其結果は果して如何。予は經世に志ある人士が先づ節を屈して、讀書生の空論にも一顧を與へんことの、必ずしも無用事ならざるを痛切に感得せざるを得ざるなり。

四

リーブクネヒト獄中遺稿

マルクス價值論批評

(大正十二年三・四・六月『改造』掲載)